

富山県上市町

弓庄城跡

第3次緊急発掘調査概要



1983年3月

上市町教育委員会

序

弓庄・館城跡は古くから知られていた上肥氏の居城ですが、県営は場整備事業（上市南部地区）にともない、記録保存が必要となりました。

上市町教育委員会では、県教育委員会の指導のもと、県農地林務事務所など関係機関のご協力を得て、昭和55年度から発掘調査を進めております。

本調査は、ようやくその緒についたばかりですが、土塁、堀、溝、道路、掘立柱建物など数多くの遺構が、きわめて良好な遺存状態で発見されました。なかでも土塁は、全長150mにもわたる巨大なもので、堅固な城構えを物語っています。こうした遺構とともに発見された出土品は珠洲、越中瀬戸を初めとして瀬戸・美濃系陶器、伊万里、越前など全国各地から伝播したものであり、また青磁、白磁などの中国製磁器、火口り臼、下駄、釜、漆器の椀などの木製品、かんざし、小柄、古錢などの金属製品なども見られ、中世の物流関係を知る上で重要な資料となるものが多く発見されました。これらの成果をもとにして、上市町の歴史や北陸の姿が少しでも明らかになり、ひいては本書が文化財保護の一助となれば幸いです。

1983年3月

上市町教育委員会

目 次

序	
例 言	
I　遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
II　調査の経緯	2
1 第1次調査	2
2 第2次調査	2
3 第3次調査	2
第2図 地形及び区割図	3
4 D地点の調査	4
5 B地点の調査	6
イ 2区	6
ロ 3・4区	7
第3図 B地点3区・4区遺構配置図	7
ハ 5区	9
6 C地点の調査	10
イ 1区	10
7 鎮座割遺跡	11
第4図 地形及び測量区	11
III　調査の成果	13
引用・参考文献	14
第5図 D地点 発掘区及び出土遺物	
第6図 D地点出土遺物	
第7図 B地点5区 発掘区及び出土遺物	
第8図 B地点2区 発掘区及び出土遺物	
第9図 B地点3区 発掘区及び出土遺物	
第10図 B地点4区 発掘区及び出土遺物	
第11図 C地点1区 発掘区及び出土遺物	
第12図 C地点1区 出土遺物	
第13図 鎮座割遺跡出土遺物	
第14図 鎮座割遺跡 発掘区及び出土遺物	
図版1 弓庄館城跡航空写真	
図版2 D地点	
図版3 D地点	
図版4 B地点5区	
図版5 B地点2区	
図版6 B地点3区	
図版7 B地点3区	
図版8 B地点4区	
図版9 C地点1区	
図版10 D地点出土遺物	
図版11 D地点出土遺物	
図版12 B地点3区出土遺物	
図版13 B地点5区出土遺物	
図版14 B地点4区出土遺物	
図版15 C地点1区出土遺物	
図版16 C地点1区出土遺物	
図版17 D地点出土遺物	
図版18 鎮座割遺跡	
図版19 鎮座割遺跡出土遺物	
図版20 鎮座割遺跡・弓庄城跡D地点出土遺物	

例 言

1. 本書は、県営は場整備事業（上市南部地区）に伴う富山県中新川郡上市町弓庄館城跡の第3次発掘調査概要である。調査は、第1期、昭和57年5月6日から同年7月10日、第2期、昭和57年8月21日から同年12月10日までの2期に分けて実施した。なお調査面積は、第1期・第2期を合わせて6,100m²である。
2. 調査は、上市町教育委員会が富山県農地林務部の委託を受け、実施した。また調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
3. 研究事務局は、上市町教育委員会におき、社会教育課主任広島丈志・高慶孝が調査事務を担当し、社会教育課長荒川武夫が統括した。
4. 調査参加者は次のとおりである。
(調査担当者) 上市町教育委員会社会教育課主任高慶孝
富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事山本正敏・
松島吉信・酒井重洋(調査員) 宮田進一・久々忠義・
同センター主任岸本雅敏(作業員) 町田喜久雄・阿部
三雄・松島松造・山崎秀男・島津弥三郎・町田フミ・
若木啓子・種田ハナエ・種田道子・種田富美子・種田
ヤイ・種田成子・種田一恵・種田君枝・山崎スミ子・
開しのぶ・開チヨ・細井節子・野村菊枝・小川ミヨ・
石黒ヤエコ・中川洋子・古川キミ・菅原ハツエ・森井
アヤ・高川アキ・大西キミ・三輪光子・三輪順子・小
川タモツ・若林雪枝・浅岡闘・松崎幸枝他。
5. 本書に掲載した遺構実測図は、高慶・松島・山本・酒
井・宮田・岸本・久々が作成した。写真撮影は、遺構を、
高慶と富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事
狩野暉が行ない、遺物は、高慶が、狩野・富山県埋蔵
文化財センター文化財保護主事橋本正春の協力を得て
行なった。遺物の整理・実測・トレース等は、松島・
酒井・高慶が行なった。
6. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員
の助言を得て、高慶・松島・酒井・山本・宮田が分担
して行ない各々の責は文末に記した。

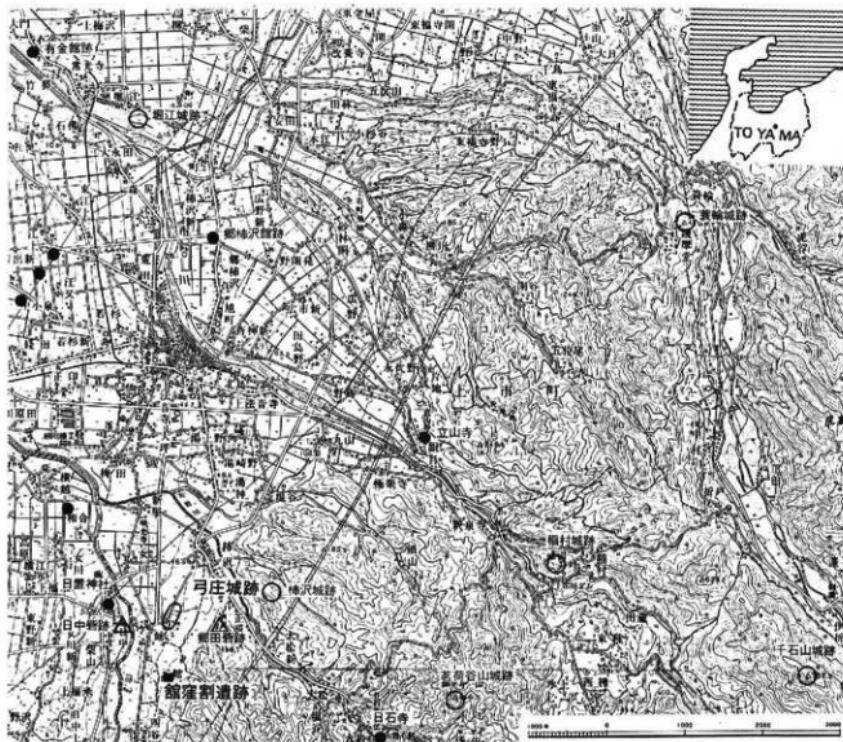
I 遺 跡 の 環 境

立山連峰に源を発する常願寺川・白岩川・上市川は、その流域で典型的な河岸段丘と扇状地を形成している。弓庄城と館窪割遺跡は、この白岩川によって形成された河岸段丘上に位置する。三河川の中・下流域は古くから開けており、先土器時代から今日に至るまで、人類の足跡は絶えることがない。

古代から中世にかけては、多くの荘園が設置されている。日置庄・大蔵庄・堀江庄・高野庄・井見庄等が複雑な変遷をたどりながら、時の権力者によって支配されている。相模國土肥郷より出でたとされる土肥氏は、この地方で序々に力を貯え室町時代に至って堀江庄・井見庄において立場を確固たるものにしている〔久保1982〕。戦国時代に至って堀江・弓庄を本城として居を構えた土肥氏は、それぞれに出城・諸城を築造した〔高岡1982〕。

弓庄城の立地は、地理的条件を最大限に利用していると言える。城の本体を河岸段丘上に置き、東側に山地、西側に白岩川と湿地帯を配している。南北に細長くのびる城郭は、本丸・二の丸・三の丸に区分され、今回の調査では、二の丸・三の丸で掘立柱建物と溝、本丸西側で土塁が検出された。さらに弓庄城跡の南側の段丘上に位置する館窪割遺跡では、縄文時代の石組炉と近世の石組み・溝が検出された。

（松島）



第1図 地形と周辺の遺跡

II 調査の経緯

町指定文化財、弓庄館城跡は、柿沢・館地内に所在する中世の城である。同地内は昭和53年度から昭和56年度までの団体貸は場整備事業が実施され、次いで昭和56年度から県営は場整備事業が年次的に実施されている。昭和55年度以降これらのは場整備事業が城跡に計画されたため、城跡保存のための協議が、上市町教育委員会・富山県教育委員会(文化課・県埋蔵文化財センター)・県農地林務部(は場整備課・富山農地林務事務所)・地元土地改良区の4者により行なわれた。その結果、一部記録保存を含む現状保存の対策が講じられることになった。

1. 第1次調査(昭和55年度)

第1次調査は、団体貸は場整備地区南側約30万m²を対象として行なった範囲確認調査(第1期)と協議の結果工事計画との調整を行ないやむなく調査を実施した第2期調査に大きく分けられる。第1期調査では対象地区のほぼ全域で遺構・遺物を検出した。遺構には、壇・井戸・建物・溝・敷石遺構を確認した。第2期調査では建物・壇・溝・土塁・井戸などを検出した。遺物には、瀬戸・美濃・越中瀬戸・珠洲・越前・伊万里などの陶磁器類、土師質土器、中國製磁器が多数出土した。また溝S D02から甲冑の一部が出土し注目された。なお調査面積は、第1期調査、第2期調査を含め約2,500m²であった。

2. 第2次調査(昭和56年度)

第2次調査は、白岩川に面した河岸段丘上の約13,000m²を対象とした第1期調査と城跡の範囲確認を目的として行なった第2期調査に分けられる。第1期調査は、城跡の西側外郭部分にあたると推定される地区では場整備事業の施工上、記録保存を要する部分に調査区を設定し全域で遺構・遺物を検出した。第2期調査では、城跡確定範囲の外堀を中心に、1×20m・1×50m・1×100mのトレーナー及び1×1mの試掘坑を設定し、それぞれ遺構・遺物の有無を確認した。その結果、一部で瓦製造用の粘土採掘のため擾乱を受けた部分があるものの、全体としては、ほぼ全域で城跡が確認できた。また、出土品も土師質土器、珠洲・瀬戸・美濃などのほか、下駄・箸・機織具などの木製品、古銭などの金属製品も多く発見され、城跡の遺存状態も良好であることが判明した。これらを総合して城の郭を復元すると(第2図参照)『上肥家記』(右沢永良著、金沢市立図書館蔵)の付図「弓之庄古城之図」とほぼ一致することが明らかになった。これにより城の規模は残存する部分で約90,000m²であることがわかった。

3. 第3次調査(昭和57年度)

調査は、前年の範囲確認調査で地区割をしたB・C・Dの各地点と、縄文時代の遺跡である館窓剣遺跡について、は場整備事業の施工の関係から削平を受ける部分についてのみ実施した。調査は上市町教育委員会が、県農地林務部の委託を受けて実施したが、地元負担金については、上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金を受けて負担した。

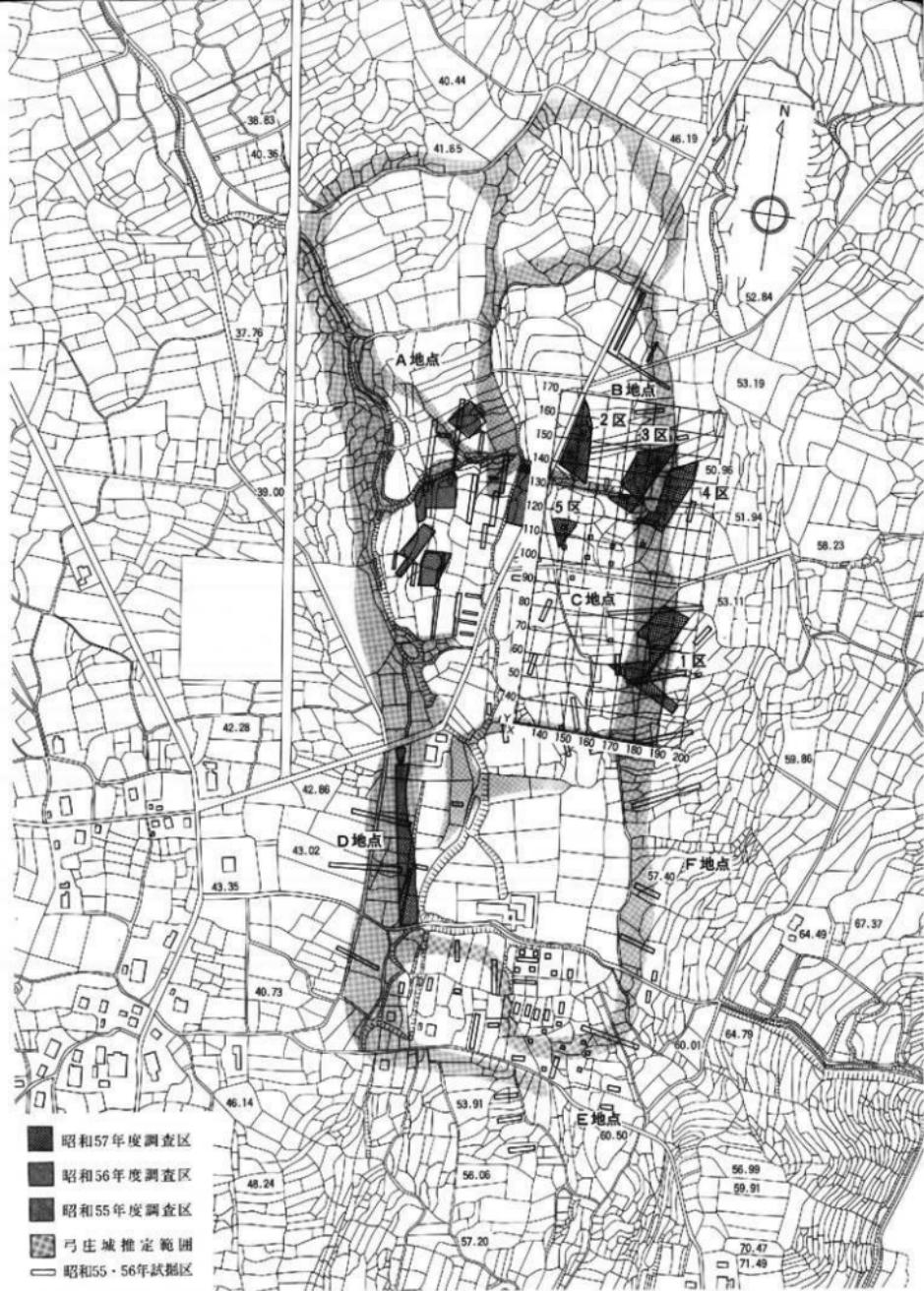
B地点

B地点は、城跡の三ノ丸に比定される地点で、城跡のはば中央を南北から北東に通る町道の東側に位置する(第2図参照)。

2地区 2地区は調査地点西側を通る町道に面する地区である。検出された遺構は、建物6棟、土塁で、このうち建物は2~3時期の軸を持つと考えられる。遺物は、土師質土器・越中瀬戸・須恵器・染付などを出土した。

3地区 3地区は2地区的東側に位置する平坦地である。検出された遺構は、建物6棟・溝・集石遺構・道路などであった。このうち建物は時期的に2時期あると思われる。また道路は石敷のものであった。

4地区 この地区は、3地区的東に位置しており郭の区画からみて、3地区と同一の区画内に区分できる地区で



第2図 地形及び区割図 (1/5,000)

ある。検出された遺構は建物3棟・道路・溝などで、これらは3地区と一群をなすものである。出土遺物としては、越中瀬戸・瀬戸・美濃・越前などの陶器、中国製磁器、下駄などがある。

5地区 5地区は、2地区的南側で町道に面する地区である。検出遺構は建物1棟・溝・土塁である。出土遺物は、越中瀬戸・瀬戸・美濃・土師質土器などがある。

C地点

C地点は、城跡の二ノ丸に比定される地点で、標高52m前後の平坦地である（第2図参照）。

1地区 この地区は、町道から東に向かって伸びる農道に面する地区である。検出遺構は建物1棟・溝・土塁である。このうち溝からは、おびただしい量の木製品が出土しており、下駄・漆器椀・箸・火つき臼・ヘラ・機械具など枚挙にいとまがない。陶磁器も、越中瀬戸・瀬戸・美濃・越前などの他、中国製磁器なども含まれている。金属製品では、古銭・刀のつば止めが出土しており注目される。

D地点

D地点は、城跡の本丸直下の地区で標高42mから46mの起伏を持つ地区である。この地区では、土塁とそれに伴う堀が検出された。土塁は全長約150m、高さ約2mである。出土遺物は、瀬戸・美濃・珠洲などの他、石製の臼・ルツボ、金属製のかんざし・小柄・古銭、木製品として下駄・箸などバラエティーに富んでいる。

縄文剣遺跡

縄文剣遺跡は、弓庄城跡の南側、標高約59mから66mの白岩川段丘上に位置する縄文時代の遺跡であるが、一部近世の遺構、遺物も包蔵する地域である。縄文時代の遺構としては、炉跡のみであるが、縄文時代早期・中期の土器、石器が多く出土した。近世では石組み遺構を検出しており、それにともなって越中瀬戸をはじめとして数多くの陶器が出土している。

(高慶)

4. D地点の調査

D地点

地形と遺構（第5図、図版2・3）

D地点は白岩川右岸の第1段の段丘上にある。この地区は標高42mの水田とそれより約2m高い平坦地からなる。平坦地は幅10~40mで南北に連なり、東側の高位の段丘（「本丸」部分）とは約7mの比高差がある。

調査は平坦地と下の水田を横切るように幅10m、長さ140mの範囲で行なったところ、平坦地は土塁、堀を埋めて作られていることがわかった。また、下の水田は沼田で、①層耕作土、②層茶褐色粘質土、③層黒色粘質土、④層灰色粘質土（地山）からなる。①~②層で中世以降の、③層下面から縄文時代の遺物が出土した。北の水田（第5図A）では、約1.5mで地山になり、小谷が入り組んだ旧地形が窺える。土塁側の水田（同図B）では土塁がほぼ水平に堆積しており、約70cmの深さである。この下の水田部分は江戸後期作成の弓庄絵図（「土肥家記」所収）の「堤ノ内溜水今ニアリ」の「堤ノ内」にあたりことから、掘り込みのない、自然の要害を利用した沼田堀を考えられる。

土塁（S A002） 基底部で幅3.7~4.5m、平坦な上部で幅1.2~1.5mである。南北に長く、100m以上ある。堀底から1.0m、犬走り状遺構（S S003）から1.7mの高さである。外法は約40°~50°、内法は約30°の勾配である。土塁は礫混りの、茶褐色土と暗赤褐色土との互層からなり土砂を版築状に固めている（岩上他1981）。この礫混りの暗赤褐色土は堀を掘った土でなく、高位段丘にある土で、近辺からの搬入が考えられる。土塁上部には堀などの施設は確認できないが、50cm大の河原石が散在している所がある。また、外法下部に河原石を野面積みにしている所があるところから、土塁の外法には土留め用に石を積んだ（森1981）とも考えられる。七畳の端に沿って幅1.1~2.3mのテラス状になった犬走り状遺構がある。この遺構から土塁に登れるようになっている。なお、上記の絵図にある「是ヨリ堀ノ内一段高ク畔アリ」の「畔」が土塁であることが判明した。

堀（SD001） 南で幅4.8m、深さ60cm、北で幅7.0m、深さ80cmで、北に行くほど幅は広く、底は深くなる。また、堀の水流も北進する。底断面では土壌鉢が深い。堀の肩は疊を埋めて土留めとしている。堀の肩から約1mで東崖にあたる。

遺物（第5・6図、図版10・11・17・20）

遺物には縄文時代の土器と石器、中世以降の珠洲、土師質小皿、越中瀬戸、美濃・瀬戸系と伊万里系の陶磁器、石製品、木製品、金属製品がある。遺物は土壌周辺から多数出土したが、堀の内からはわずかである。

縄文時代の遺物 土器は後期後半のもの（図版20の13・17）と晩期後半のもの（36、図版20の14～19）がある。36は沈縁を菱形状に施し、外面に赤彩を留める。35は石鋸形石器で、背の部分が弧状で刃の部分は直線的で、ほとんど破損していない。石質は砂岩で、時期は晩期であろう。

珠洲（21～23） 器種には甕（21）・鉢（22・23）がある。23は口径31.5cmの片口鉢で、口縁端部を平直にし、内面に条の明確でないおろし目を持つ。外底面は回転糸切りの後、ヘラおこしを行う。時期は吉岡編年〔吉岡1981〕によれば、Ⅰ期後半～Ⅱ期にあたり、13C前半であろう。22は口径19.5cmの播磨の口縁部で、外面を強く押し、口縁内削ぎにクシ描き波状文を施す。内面に5条のおろし目がある。Ⅳ期にあたり、16C前半になろう。

土師質小皿（24・25） 24・25は口径約9cmで、口縁が丸く立ち上がる。口縁外面にヨコナデ、体部外面にナデで指頭圧痕を残す。内面はナデ調整する。24は内外面に油漬が付着し、灯火皿として使用されている。

越中瀬戸（1～11・15～18・20） 器種には皿・椀・小壺・香炉・蓋・おもりがある。皿は削出し高台で、見込みは露胎である。口縁部の形態は丸く立ち上がるもの（1～4）と「く」の字状に直立するもの（6～9）がある。1は口径11.8cmの黄緑色灰釉の皿で、内面に印花文がある。露胎部分は灰色で、胎土は密である。2・3は乳白色の施釉で、露胎は暗赤色で胎土は粗である。4～9は口径11～12cmの鉄釉の皿である。16は波状口縁の椀で、鉄釉がかかる。6・7・9・16は胎上・焼成が他の土器と違い密・堅緻で、瀬戸・美濃系のものであろうか。10・11は外底面に回転糸切り痕のある小壺の底部で、鉄釉がかかっている。15は鉄釉の茶入、20は鉄釉の香炉である。17は頂部外面に回転糸切り痕のある蓋で、小砂粒が吹き出している。18は長さ5.5cm、孔径2.4cmのおもりである。

瀬戸・美濃（12・13） 12は口径9.8cmの天日茶碗で、断面に漆が付着している。13は口縁端部が二方に開き、口縁内外面だけ黄緑色灰釉がかかる三足盤の口縁部であろう。なお、19は口縁平直で、外底面に回転糸切り痕のある椀である。外面はやや赤味をおび胎土が密で越前かもしれない。

伊万里（26～32） 白磁・染付がある。器種には皿（26・28）、楕（27・29～32）がある。26は白磁の皿である。27・31は貼付け高台で、27は高台内面まで施釉されている。31の見込みは露胎が蛇の目となる。

石製品（33） 33は内面がよく磨耗している掲き臼である。その他、半分程欠損しているが、内径8cm、深さ5cmの内空の半球状石製品（図版11の11）がある。鍛冶工房用のルツボであろう。

木製品（1～12） 箍状木製品（1～6）、下駄（8・10）、曲物（12）、用途不明の木製品（7・9・11）がある。1・2は両端がとがっており、長さ19.5cmである。3～6は一方だけとがっているもので、長さ12.5～18.5cmである。8は連歯の下駄で、長さ15cm、幅5.5cmの小型品で、子供用であろう。台部に残る足底から左足用で、足の外側面にあたる歯の面はすりへっている。後蓋は後歯の前後に穿たれている。10は納穴が貫通した露刃の差歎下駄の歯の部分である。12は曲物の底板で、径約14cmである。図版17の4は径5cmの小型曲物の底板である。7は中央に納穴1つがあり、四辺の内側を面取りしている。その他、杓子状の9や両側に抉りのある11、漆椀がある。

金屬製品（図版11の1～8・10） 小柄（2）、煙管（1・10）、かんざし（3）、古銭（4～8）がある。2の小刀の部分は鉄製で銹化し、柄の部分は銅板を巻いている。10は煙管の雁首で、1は真鍮板を打ち合せた吸口である。3は耳かきの部分が折れた金製かんざしである。古銭は開元通宝2枚と景徳元宝・元祐通宝・永楽通宝各1枚の中國銭と寛永通宝1枚である。

（宮田）

5. B地点の調査

イ. 2地区

B地点は、弓庄城推定内の北側に位置し、三ノ丸に比定できる。西側のA地点は、過去2ヶ年にわたり、部分的に調査がなされており（酒井他1982）その比高は、旧の田高で約2mを測る。2地区的調査面積は約1,000m²である。検出した遺構は掘立柱建物で、数棟が重複しており、3～4回の建てかえが行なわれている。

遺構（第8図、図版5）

建物・土塙がある。その他に、直径約1.5～3mの風倒木痕が多数存在した。

建物は合計6棟確認できた。すべて調査対象区内の南側に位置する。SB501・SB503・SB504・SB505の5棟は、重複関係をもつ。

SB501の柱間は2間×1間で南北の方向を向く。桁行・梁行は6.0m (3.0+3.0) ×2.1mである。SB502も2間×1間の柱間をもつが、東西の方向を向く。桁行・梁行は4.8m (2.4+2.4) ×2.4mで、SB501よりひとまわり小さな建物となっている。

SB503はSB501を包括して位置する。柱間は3間×3間で南北の方向を向く。桁行・梁行は9.3m (3.0+3.3+3.0) ×8.1m (2.7+2.7+2.7) である。SB504・SB505と重複関係をもっており、時間的な隔たりが考えられる。

SB504とSB505は、ほぼ同規模の建物である。それぞれ柱間は4間×3間であり、東西の方向を向く。両者は東西の方向に約1.2mずれて建てかえられた建物と解釈できる。SB504の桁行・梁行は9.6m (2.4+2.4+2.4+2.4) ×8.1m (3.0+3.0+2.1) で、SB505は、9.6m (2.4+2.4+2.4+2.4) ×8.4m (3.0+3.0+2.4) である。SB505の方がやや大きな建物となっている。

SB506は前述の建物群の西側に位置し、この1棟のみ、他の建物と重複関係をもたない。柱間は4間×3間で、東西の方向を向く。桁行・梁行は9.9m (1.8+3.0+3.0+2.1) ×7.2m (2.4+2.4+2.4) で、桁行は等間隔になっておらず、両側の柱間がせまい。SB504・SB505とはほぼ同規模の建物であり、向きも同じであることから、この3棟は順次建てかえが行なわれた同一の建物と解釈されよう。

SB504・SB505・SB506の3棟は建てかえが行なわれた同一の建物であるが、その順番は不明である。ただ弓庄城内あるいは築城以前の建物の充実化を前提とし、建坪が順次増加するとすれば、SB506→SB504→SB505の順番が想定される。SB503は、SB504・SB505と重複関係を持ち、同時存在はありえない。よって、SB506と同時存在もしくはそれ以前の建物と解釈できる。SB501とSB502については、①SB506との同時存在、②SB503よりさらに古い建物の解釈ができる。いずれにせよ、建物の変遷は、弓庄城全体の地割と建物の配置の関係で解釈されねばならぬ今後の成果が期待される。

遺物（第8図、図版13の3）

出土量は少ない。土師器、珠洲、瀬戸・美濃、越中瀬戸、中国製陶磁器がある。

土師器は鍋の破片が出土している(19)。内外面にカキ目が施され、さらに外面にはヘラケズリの調整が施されており、平安時代のものと考えられる。

珠洲は、壺・甕・鉢が出土している。18は四耳壺で、ボタン状に付着されたつまみをもつ。I～II期に比定されよう。瀬戸・美濃系陶器には皿(9)がある。内面には灰釉が厚く施釉され、文様(菊花文?)が印刻される。土師質の皿(1～5)は、大きさで直徑約10～20cmのばらつきがある。1は厚手で口縁部が短かく鋸くちあがり、比較的古い様相をもつ。2は内面全体に、スヌの付着が観察される。

近世の遺物としては、越中瀬戸の皿(6～8・11～12)があり、すべて黒色の鐵釉である。

(松島)

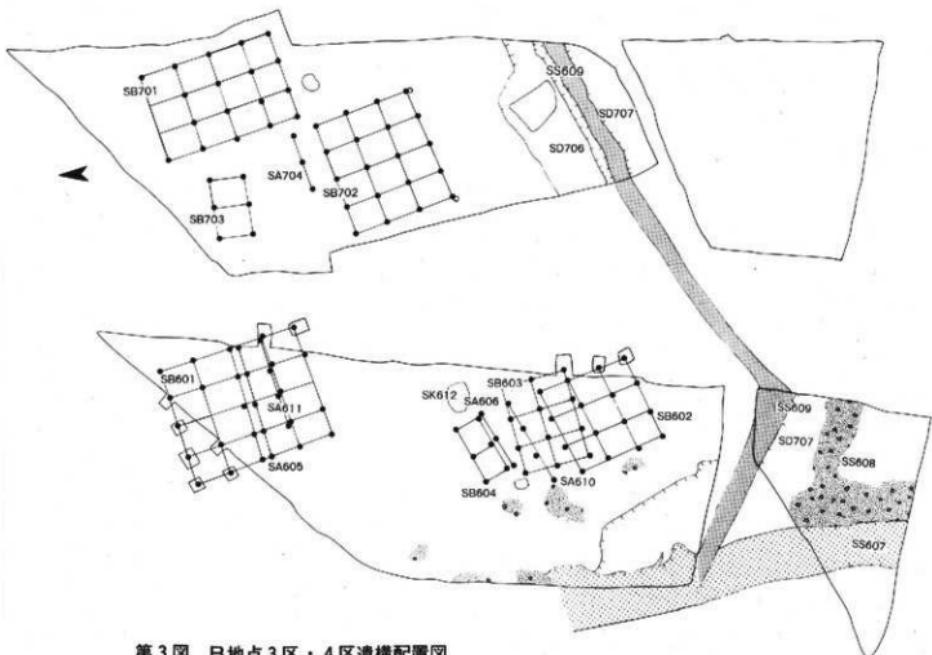
口、B地点3・4区

3・4区は、本城より三番目の東側に位置する郭のほぼ中央部と推定される部分で、段丘上では、2段目の平坦地に位置する。両区は、約10mを隔てる平坦部で同一建物群と考えられるため両区を一括した。

造構（第3・9・10図、図版6・7・8）

建物群は、大きく3群に分けられる。1群は、SB603 3間×3間 7.2m (2.4+2.4+2.4) ×5.4m (2.7+2.7) とSB604 2間×1間 4.8m (2.4+2.4) ×2.1mの2棟で約6m離れて平行に並ぶ建物で両建物の間にはSB604にそって櫓SA606が設けられる。また、建物の西側には、土塙状の浅い穴が掘られ、建物建築の整地で出土石を埋め込む。この土塙状の穴から珠洲編年1期とされる大甕が出土しており、最も古い建物群と考えられる。

第2群は、「コ」字形に配置される建物群で、南北棟のSB701 4間×3間 11.1m (3.0+2.7+2.7+2.7) 7.2m (2.4+2.4+2.4)、SB601 4間×4間 12m (3.0+3.0+3.0+3.0) ×9.9m (2.4+2.4+2.7+2.4) と東西棟のSB702 4間×4間 9.6m (2.4+2.4+2.4+2.4) ×7.2m (2.4+2.4+2.4+2.4) がある。しかし、SB601は、SA611と重複しており2間×4間の建物2棟の重複か建て替えが行なわれた可能性をもつ。また、SA704は、SB702に付く櫓と考えられる。第3群は、規模3間×2間 7.2m (2.4+2.4+2.4) ×5.4m (2.7+2.7) でSB602・SA610と重複するSB603とSB703 2間×1間 4.8m (2.4+2.4) ×3.0mの2棟がある。両者は、同一方向を向き建てられている。これらの建物は、すべて総柱であり完数尺となることや、出土遺物などから弓庄城築造以前（第一期）の建物群と考えられる〔酒井1982〕。また、建物群は、A地点5区・3区で発見された建物群と共通した柱間、完数尺、配置をもつことから、連続的に建てられた建物と考えられる。



第3図 B地点3区・4区造構配置図

S S 609は、小標を敷き詰めた幅約2mの道路跡で両側に排水用の溝S D 706・707を設ける。S S 609は、3区南側でも検出でき「く」の字状に曲がり東西に続く。しかし、隣接するB地点2区、第2次調査区A地点1区では認められない。また、S D 707内からは、越中瀬戸などが出土しており近世の道路跡と考えられる。

S D 609は、南北に続く幅約4m、深さ50cmの溝で弓庄城の郭内を区画するための溝と考えられる。S S 608は、S D 609の東側の河原石を並べた部分で、3区南端にでこぼこに「L」の字状に並び検出されたが、性格は、不明である。
(酒井)

遺物（第9・10図、図版12・14）

出土した遺物は、須恵器、中世の珠洲、瀬戸・美濃、中国製磁器、土師質上器、近世の越中瀬戸である。さらにB地点3区のS D 607から各種の木製品が出土し、B地点4区のS D 707から下駄が1点出土している。

須恵器には杯蓋（第8図1）と甕の腹部破片がある。杯蓋は、天井部にヘラケズリを施し、口縁端部がわずかに肥厚し、内側に鋭くおり曲げている。8世紀に属すると考えられる。珠洲は、甕・壺・鉢がある。壺（第8図10）は口径24cmを測り、大型の壺といえる。口縁端部を鋭く外反させている。肩部につまみがつく四耳とと考えられる。甕（第8図14、第9図29）は、いずれも口径40~45cmを測る。口縁端部をやや上向きにおりまげている。29の肩部には、ヘラによる縱方向の弦線が刻まれており、刻文の一部と考えられる。14は、SK 610から出土している。鉢（第8図11~13、第9図27・28）は、内面におろし目をもつもの（11~13・28）ともたないもの（27）に分けることができる。28の内面には密におろし目を施し、口唇部に櫛描波状文をめぐらしている。他の鉢の内面には間隔をおいておろし目を施している。珠洲の各器種の特徴から、一部は中世後半に属するが、大部分は珠洲編年〔吉岡1981〕のI~II期に属すると言えよう。

土師質上器はすべて皿の形態をとり、高台のつくものとつかないものに分類できる。高台のつくもの（第9図32）は、底部に糸切り痕を残さず、円柱状の高台となっている。高台のつかない土師質小皿（第8図2~9、第9図22~25）は口径が8~20cmと変化に富む。2と4は比較的厚手で、口縁部が短く急角度でたつ。その他は、薄く整形され、やや外反しながらゆるやかに口縁部がたつ。

瀬戸・美濃系陶器では碗（第9図18）と鉢（第9図38）がある。碗には外面底部を除いて薄く灰釉が施されている。さらに内面に重ね焼の痕跡が残っている。鉢は口径40cmを測る大型品である。内面に櫛状工具による波状文が配され、釉薬は鐵釉が施されている。

中国製磁器には、白磁碗（第9図37・44）と青磁碗（第8図15・16、第9図31・39・40~42・46）がある。釉調は全体的に深い青緑色である。46の内面には草花文が施されている。口縁がまっすぐたちあがるものと、外反し平坦な面となっているものにわかる。大半は龍泉窯系青磁と考えられ、最近の研究成果〔横田他1978〕にてらしあわせると、中世前半に位置づけできる。

近世の越中瀬戸には、各種の器種がある。皿（第8図18~22、第9図7~18）は、鐵釉と灰釉に分類でき、内面に菊花文が施されるものもある。碗（第8図34、第9図1・2・4）、壺（第8図27、第9図5・9）、茶入れ（第9図21）、小杯（第8図29・30）などがあり、いずれも鐵釉が施されている。

S D 607からは、各種の木製品が出土している。下駄（第38図37）は、一本から削り出された連歎下駄で、全長14.5cmと小型で子供用と思われる。43は幅4.5cmの薄い板材の上部両端に切り込みを入れた木札で墨書きは認められない。

36は板材を素材とし、肩部を削りだして杓子状に成形した木製品である。42は厚さ約1cmの板材の長辺の一端に連続した刻みを入れたもので、対辺には目クギの痕跡が残る。編物に使用する編台的な性格が与えられよう。38~41は箸状木製品で約30本出土している。S D 707からは差僧露卯下駄（第9図47）が出土している。台部は断面が舟底形に成形され、歯をとめる柄穴は前に二ヶ所、後に一ヶ所あけられている。鼻緒孔は黒くこげており、焼火箸で穿孔されたものと考えられる。
(松島)

ハ. 5 地区

5区は、2区南側で昨年度調査したA地点1地区の東側に位置する。発掘区西側で、掘立柱の建物S B801と土塙SK803・溝SD806を検出している。地山（遺構検出面）は黄色の粘質土で、調査区全体にみられる。

遺構（第7図、図版4）

検出した遺構は、掘立柱建物1棟・棚列1箇所・土塙2箇所などがある。遺構は調査区のほぼ全体でみられたが、若干南西部に集中している。

建物は、掘立柱建物S B801の1棟があり、溝SD806と切り合い関係をもつ。規模は、桁行3間、梁行3間の建物で、柱間は、桁行で $2.4+2.4+2.4\text{m}$ 、梁行で $2.7+2.7+2.7\text{m}$ 、それぞれ、 $8+8+8\text{尺}$ 、 $9+9+9\text{尺}$ の定数尺となる。棟の方向は城の郭の方向とはほぼ平行で、磁北に対して約 22° ほど西側に傾いている。またこの建物S B801はSD806に先行して作られている。

棚列S A802はトレチ南側にあり、おそらくS B801に付随したものと考えられる。柱間は2間で、柱間距離は $2.7+2.7\text{m}$ である。

溝SD806は、深さ約1mで断面は「U」字形を呈するものである。おそらく、三ノ丸内部での区画のための溝であると考えられる。

土塙は、SK803・SK804・SK805の3箇所を検出した。このうちSK803は東西約5m南北約2mで、SB801より後に作られている。おそらく溝SD806と同一時期の遺構と考えられる。

遺物（第7図、図版13）

遺物は、トレチ全体にみられるが出土量は少ない。越中瀬戸、土師質小皿、青磁、染付がある。

越中瀬戸は皿・壺・鉢・擂鉢・茶入れがある。皿は口径10cm~12cmで、体部から外に開くものと、内側に立つものの2種類がある（1~6）。このうち、1は重ね焼の際、熔着した口縁を残している。高台をもつ皿2~4は、いずれも削り出し高台である。壺は小型で口径が10cm内外のものである（7・8・12）。鉢は、いずれも円筒形のもので口径12cmの小型のものである。茶入れは、比較的扁平な平葉形のものである。擂鉢は体内面に、おろし目を施すもので、回転糸切り痕を残している。

土師質小皿は、22・23の2種類がある。22は口径7cmを測り、体部が丸みをもって開くものである。23は、底部を肉厚に形づくり、回転糸切り痕を残すものである。この23は、SB801とともに検出されたもので、珠洲の編年〔吉岡1981〕で、I~II期に比定できるものであろう。

青磁・染付（13~18・20）はいずれも中国製のものと考えられる。青磁18は、暗緑色の釉調を呈するもので、龍泉窯系のものと思われる。外面には先端の尖った蓮弁をヘラ状工具により施している。染付は、いずれも施である。13は流水文を施すもので、14・16は花文を施している。このうち14は、口縁がフラットで、その面にも文様を施している。17・18は、外面にろくろの回転と平行に直線を施している。これらの青磁の年代は現在のところ確定的なものはないが、上田秀夫、小野正敏両氏の試案的編年〔上田1982・小野1982〕によると13世紀から14世紀には比定されるものと考える。

（高慶）

6. C 地点

1 地区 (第11図、図版9・15・16)

1区は、B地点4区の南側で、町道から東側に向かって伸びる農道に面した所に位置している。遺構は、トレント北側と南東側 (第11図A・B) で検出されたが、その他の部分は、瓦製造用の粘土採集のため擾乱を受けており遺構は検出されなかった。

遺構 (第11図、図版9)

検出した遺構は、掘立柱建物S B 901、溝S D 902・903・904がある。掘立柱建物S B 901は、桁行3間、梁行3間の建物で柱間はそれぞれ2.7+2.7+2.7m、2.4+2.4+2.4mを測り、9+9+9尺、8+8+8尺の完数尺となる。溝S D 902は幅が2m前後で、東から西に伸びている。この溝からは多数の木製品が出土しており注目される。溝S D 903は幅約1mを測り、南北に伸びている。この溝からは、面取りを施した柱根が発見されている。SD 902・SD 903は、それぞれ郭内部を区画するものであろうと考えられる。溝S D 904は幅が約30cmを測るもので、いづれかの施設に付随するものであろう。

遺物 (第11・12図、図版15・16)

遺物には、越中瀬戸、珠洲、土師質土器、中国製の青磁・染付、金属製品、木製品がある。越中瀬戸では天目茶碗と皿がある。皿には、菊花文スタンプを施すものもある (第11図21、図版15の1、9・10)。珠洲は、擂鉢で珠洲の編年 (吉岡1981) でⅦ期に比定される (図版15の2の4)。土師質土器は、口径11cm内外の皿 (1・2・6) と口径14cm内外の皿 (3・5) がある。5は高台を持ち、底面に回転糸切痕を残す。土師質土器は、珠洲の編年に対応させるとI-II期に比定される。

中国製の青磁 (22-24) では、シノギハ文を施す22・24と内底面全体に花文を施す23がある。いずれも淡緑色の釉調を呈している。龍泉窯系のものであろう。白磁では玉縁を持つ25がある。

金属製品には、工具16、刀片17、刀のつば止め3、永楽通宝4 (図版15の2、16・17、同3の3・4) がある。刀のつば止めは、長さ7cm、幅3.5cmを測る。

木製品は、そのほとんどが溝S D 902から出土した。これらを大きく分けると、穀物、食膳具、容器、工具、部材などで、その他、用途不明のものなど多数ある。

穀物には一本造りの連歛下駄3点と差歛下駄1点がある。いずれも平底が長円形のものである。第11図29・30、第12図13の連歛下駄は大きさがいずれも20cm前後である。第11図31の差歛下駄は全長25cmを測る。

食膳具には、ヘラが2点ある。第11図33は全長34cm、幅8cmで先端部が円形に削り出してある。他の1点は先端部を方形に削り出した32がある。

容器には、漆器の椀 (第12図の6) がある。口径約15cmで内外面ともに黒漆が施されている。

工具には、第12図1の火きり臼、2の栓、11の火きり杵状の棒がある。火きり臼は、全長約13cmで面取りのある側面に8個の臼孔をもつ。両端に臼孔の一部がみられ、原形はもう少し長かったようである。これは、土師質土器、陶磁器などと共に伴しており中世の遺物と考えられる。

部材としては図版15の10がある。ほぞ穴が交互に3個貫通している。

用途不明のものには、第12図3-5・7-9・12がある。3は、上端部に切り込みがある。4は、残存部で全長約15cm、幅5cm、上部がえぐられている。人形とも考えられる。7は2個一対の穴が貫通しており、工具などの部品と考えられる。8は上端に小さな孔をもつ薄い板で、木札とも考えられる。9は、板の一辺を5箇所にわたって削り出したものである。12は両端に届いた穴を施した長さ17cmのものである。部材もしくは工具などの部品と考えられる。

(高慶)

7. 館窪割遺跡

(イ) 地形と層序 (第4図)

遺跡は弓庄城跡の南側約600mに位置する。地形的には、東側に南北に伸びる山地と、北流する白岩川に挟まれた段丘上とみることができる。この段丘は、山地から白岩川に向って若干蛇行しながら西流する小河川によって細長く区切られ、舌状の台地状を呈する。遺跡はこの舌状台地の上に東西約160m、南北約100mの範囲にわたって占地している。また、東から西に向ってゆるやかに傾斜してくださっており、その比高差は最大約10mをはかる。遺跡の現況は、水田、宅地で、標高は60~70mである。

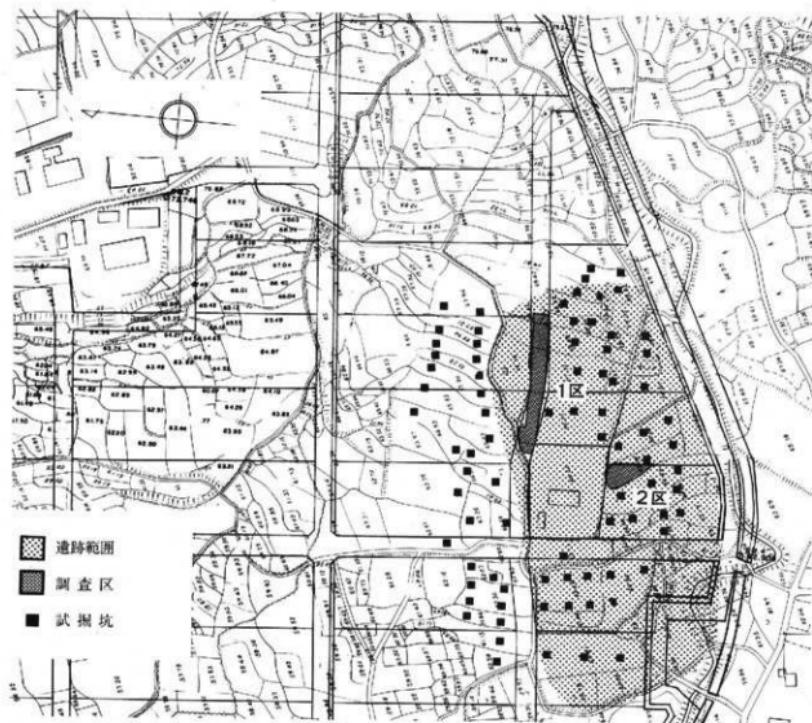
今回本調査を行ったのは、遺跡の北端部で、排水路にかかる地点(第1区)と、遺跡のはば中央部で、は場面工事で切土工事となる地点(第2区)である。第1区では主として近世以降、第2区では縄文時代のものが出土した。

層序は、地点によって若干の違いがあるが、基本的には以下のとおりである。I層淡灰色土(耕作土)・II層赤褐色土(水田底土)・III層暗灰褐色土・IV層褐色土・V層暗褐色土・VI層黄色砂質土(地山)。遺物はI層からIII層までに含まれる。

(ロ) 縄文時代

遺構 (第14図)

縄文時代に属する遺構は、2区の北側X2Y9区から石組炉が1基検出されている。石組炉は、細長い自然礫を4



第4図 地形及び調査区 (1/2000)

個用いて、ほぼ正方形に囲み、炉底には、平らな蝶と円環が計3個散かれている。大きさは外側で一边約60cm。焼上、炭化物はほとんど検出できなかった。この石組炉は、地山への撤移層と考えられる褐色土ないし暗褐色土層中に埋かれている。おそらく竪穴住居跡に伴うものと考え、周辺部の精査を行ったが、擾乱などもあり、柱穴は確認できなかった。時期は中期と考えられる。

遺物（第13・14図、図版19・20）

縄文時代の遺物は、縄文土器と石器類で、整理箱に約10箱の量がある。整理作業は途中であるため、ここでは代表的なものをいくつか取り上げ、概要を述べることにする。縄文土器は早期末ないし前期初頭の一群と中期中葉の一群に分けられる。

第13図2は、横位の羽状縄文を施す尖底の深鉢である。口縁部には山形の突起が4か所に付く。内面は無文。3は尖底部破片である。図示したもの以外に、断面三角形の隆帯を持つもの、刺突文を持つもの、貝殻腹縫や縄文を押しつけるものなどがある。いわゆる板栗寺式（富山県教委1965）に比定できる。中期の土器は、天神山式（小島1975）から古串田新式〔同前〕までのものがある。7は、波状口縁の深鉢である。波頂部から無文の隆帯を基線とするS字状の満巻文様がさがり、胴下半は縦方向の半截竹管文を引く。文様単位は4単位となる。無文部のふちには一部刻み目が見られる。時期は天神山式でも新しい段階か、古府式に比定できよう。4は、波状口縁の浅鉢である。波頂部には突起が付くものと思われる。5は、波状口縁の深鉢である。口縁部には半截竹管文を一条めぐらして、以下は斜縄文となる。6は、同じく斜縄文の平縁深鉢である。1は、外反する胴上部の破片で、斜縄文を施した後、幅広の浅い沈線を3条めぐらしている。9は、鉢形土器である。口縁部を欠いているが、強く外反する器形となる。この他に、いわゆる大木系の土器も出土している。石器はそれほど多くない。第13図10・11は定角形の磨製石斧である。石質は蛇紋岩。12は撥形の打製石斧で、砂岩質。13は、扁平な蝶を利用した凹石である。片面に2個ずつ計4個の窪みを有する。一端に敲打痕が残る。砂岩質。14は、打ち欠いて作った石錐である。以上の石器はほとんどが縄文時代中期に属するものと考えてもよいであろう。この他に時期不明の砥石が1点ある。

（山本）

(iv) 縄文時代以降の遺構・遺物

遺構（第14図、図版18）

遺構としては近世の石組み・溝がある。この石組みは、近世の建築物の一部と思われ、50cm前後の石を東西に並べて組まれている。この石組の北側は約50cmほど掘り深められており、水舟などの施設が考えられる。溝は南北に流れるもののように西側に石を並べている。出土遺物からみてこの二つの遺構は同一時期に存在したものと思われる。

遺物（第14図、図版19・20）

遺物は、越中瀬戸、瀬戸・美濃系陶器、伊万里系の焼物などの他、瓦質の手あぶりなどがある。越中瀬戸では、皿・碗・壺・壺・鉢がある。皿は口径が11cmで体部から上方へ立ち上がり、口縁で外溝する第14図の2がある。碗はいずれも黒色の釉が高台を除いて全てに施してある6～9と灰釉を施した4がある。6～9は体部から上方に向けて立ち上がるるもので、4は、体部が丸みをもって立ち上がるるものである。壺は双耳のもので、茶灰色の釉が施してある。鉢は灰釉が施される19がある。瀬戸・美濃系陶器では盤と鉢の注口部がある。盤は口径が約21cmのもので暗緑色の釉が施してある。染付は、そのほとんどが伊万里系の焼物である（第14図の12～17）。12～14・16・17には、見込みに銘が施してある。このうち、16・17には「草」・「寿」という字をくずした文字が書かれている。特殊なものとしては、内面に富士を描いた8がある。この底面には「たち加衛門」あるいは「たち久衛門」と判読できる文字が朱で書かれている。おそらく所有者の屋号ではないかと思われる。瓦質の手あぶり20は、外面にスタンプ状工具により、花と葉の文様が施されている。

これらの遺物はいずれも江戸時代末期から明治初期にかけての遺物であると思われる。

（高慶）

III 調査の成果

本年度の調査では、城跡の三ノ丸・二ノ丸の一部・本丸の西側で調査を行なった。調査面積は約6,100m²であったが、本遺跡における造構、遺物の包蔵状況はかなり明確に把握することができた。なかでも本丸西側で発見された土塁は、城構えを知る上で重要な成果の一つとなった。以下造構、遺物について若干述べてみたい。

土塁について

土塁は、本丸西側の白岩川段丘直下で発見された。基盤となる標高42mの平坦面から約2mの高まりをもって作られたこの土塁は、全長約150mと推測され今回そのうちの約50mを検出した。一般に土塁は、その内側の堀となる部分を掘り上げ、その上げ土を利用して構築されるものであるが、今回発見された土塁は、本丸のある段丘を削りその土砂を板築状に積み上げて作られている。土塁は、一部石積みが残っており、土塁と石垣を併用した「詰巻石塁」であろうと推定される。この土塁は、「土肥家記」(有沢永貞著、金沢市立図書館蔵)の付図「弓之庄古城之図」に「是ヨリ堀ノ内一段高ク畔アリ」と記されており、位置関係も一致する。昭和56年度調査で古城之図が正確であることは明らかであったが、この土塁の発見により、ますます信頼性の高い史料となった。

掘立柱建物と出土遺物について

掘立柱の建物は、B地点2区で6棟、3区で4棟、4区で3棟、5区で1棟、C地点1区で1棟をそれぞれ検出している。これらの建物は、2×1間、3×3間、4×3間などに大きく分けることができる。3×3間以上の建物はいずれも純柱で、柱間が桁行で、8+8+8+8+8尺、梁行で、10+10+8尺となるSB505や10+9+9+9尺、8+8+8+8尺のSB701などの建物が一つのパターンとなっている。

これらの建物と共に伴する遺物は、上師質土器、珠洲などであるが、いずれも珠洲の編年でI～II期に比定されるものが多い。こういった特色を持つ遺跡としては、白岩川沿いに上市町神田遺跡がある。この遺跡の掘立柱建物は、今回発見された建物と非常に類似したパターンを持つもので、出土遺物も珠洲の編年でI～II期である。

日置莊・井見莊について

馬庄城がある館・柿沢両地内は12世紀中頃から15世紀まで、日置莊・井見莊といった莊園が存在したと推測され、この二つの莊園は14世紀中頃、堀江莊（現在の滑川市堀江周辺）の莊官として越中に入部してきた土肥氏が在地領主化する中で、土肥氏の領地となっていくが（石原1956）今回検出された建物の多くは、13世紀から14世紀のもので、土肥氏が入部する以前の時期に比定される。先に述べた神田遺跡も、莊園に関連した遺跡であるなら、白岩川沿いの莊園経営を考える上で非常に興味深い発見といえる。

まとめ

以上の事柄から、今回発見された建物や遺物の多くは直接馬庄城と結びつくとは思われず、日置莊・井見莊といった莊園関係の施設となる可能性が強いと考えられる。建物が馬庄城の郭と平行あるいは直交して建てられているという点はあるが、城それ自体が白岩川の細長い河岸段丘上に立地している点を考えあわせると馬庄城以前の施設もこうした立地を考えて作られたものと推測される。

昭和56・57年度の調査で検出された建物は20棟あまりあるが、これらの多くが13世紀から14世紀代の建物となる可能性が強く、莊園関係の集落もしくは莊園経営のための施設が存在していたものと思われる。馬庄城は土肥氏が莊園を吸収していく中で、こうした施設のあった立地そのものを城の内部に取り込んで築城されたものかもしれない。仮に、莊園関係の立地を利用して築城されたとする、今回調査した三ノ丸比定地区には城の施設として残るものは堀と溝だけとなり、建物などは非常に少なかったことになる。

城の中心部の調査は米年度以降であるが、一つの仮説として考えられることをまとめると、

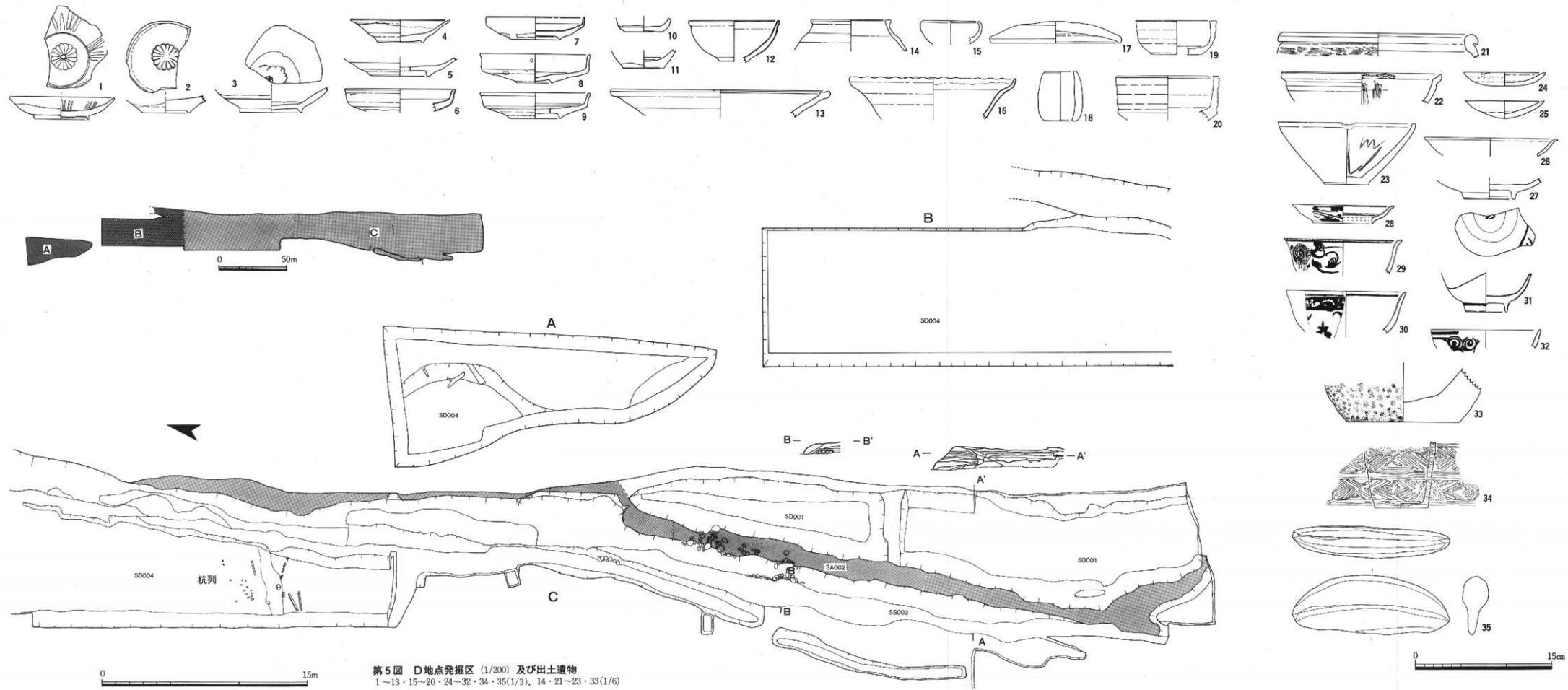
1. 弓庄城はそれ以前にあった立地を利用して築城された城である可能性がある。
2. 弓庄城は、居城として機能していた部分が本丸を中心とする A 地点 1 区・6 ~ 8 区の白岩川ぞいの段丘上に限定されていた可能性がある。

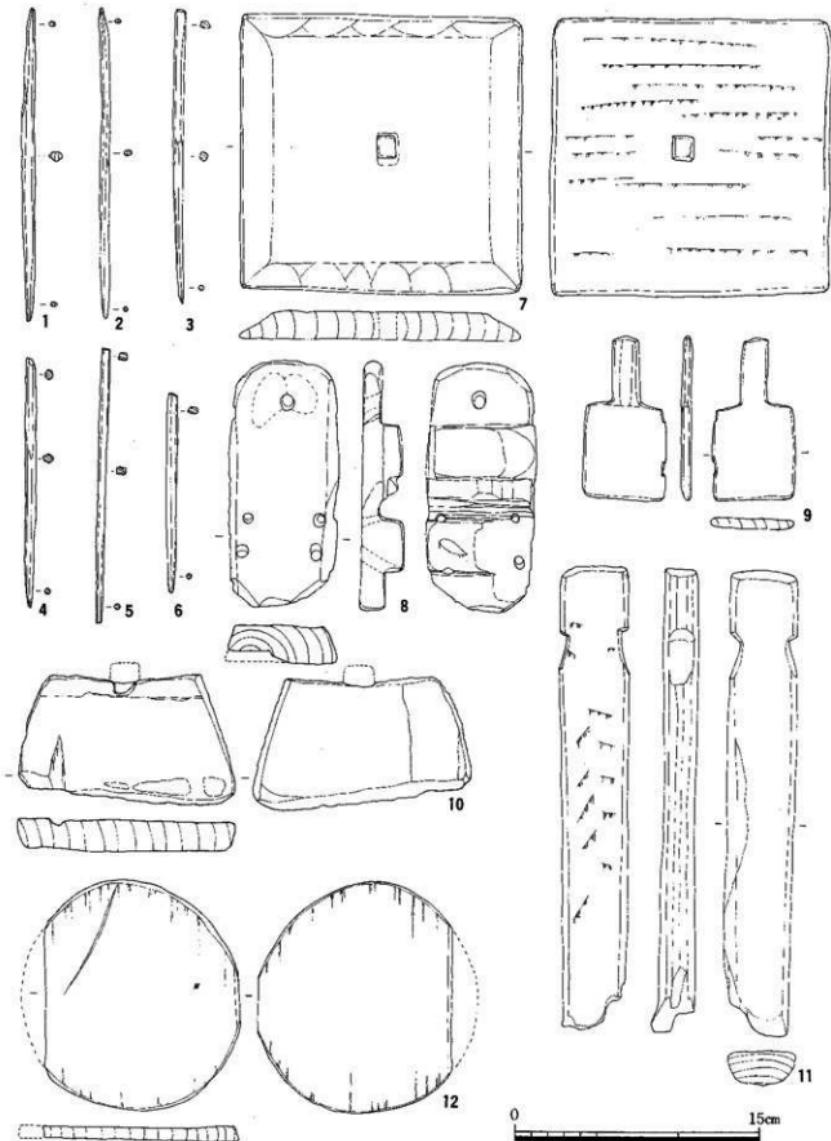
以上の 2 点が考えられる。

(高慶)

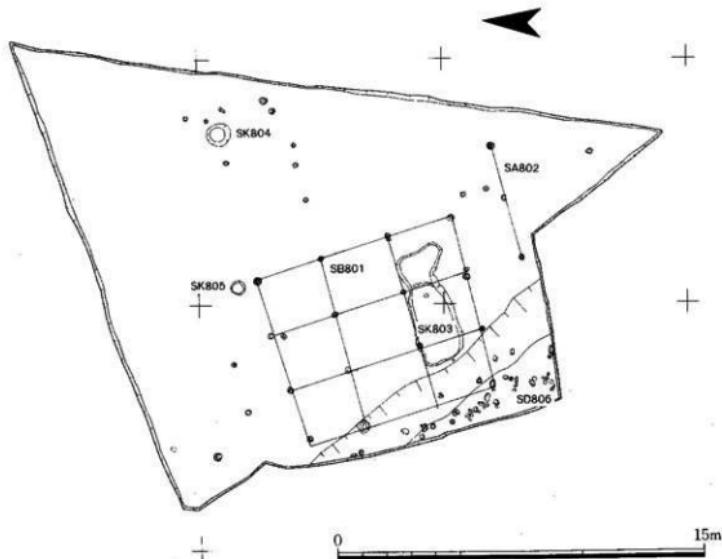
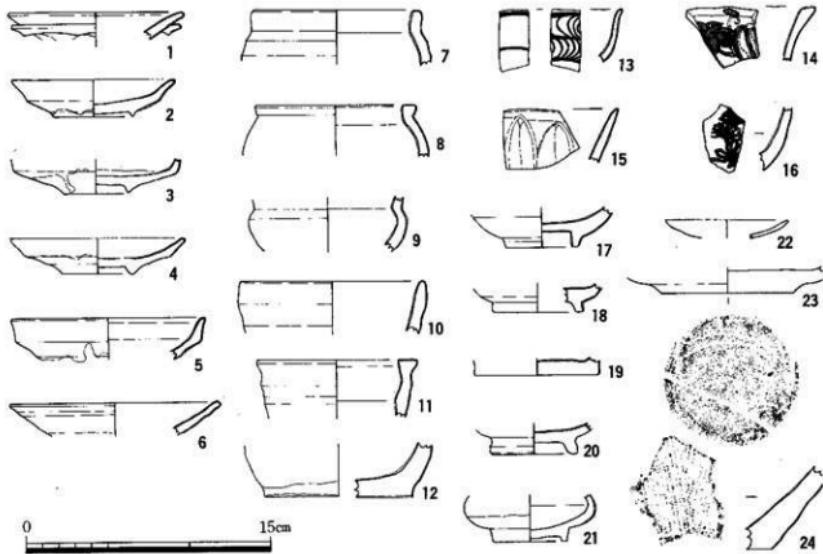
——引用・参考文献——

- イ 石原与作 1956 「白岩川中流域の歴史的事実—弓庄・寺田郷の研究—」
　　堀上照朗・中山 晋 1982 「下都賀郡大平町川連城跡」栃木県埋蔵文化財報告第48集 栃木県教育委員会
　　上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
　　小野正敏 1982 「14~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- タ 久保尚文 1982 「白岩川流域諸莊園の考察—高野莊を中心に—」『かんとりい』No.6 越中の歴史と文化を考える会
- コ 小島俊彰 1974 「北陸の繩文時代中期の編年一戦後の研究と現状」『大境』第5号 富山考古学会
　　高慶 孝 1982 「弓庄・館城址の調査概況」『かんとりい』No.6 越中の歴史と文化を考える会
- サ 酒井重洋・神保孝造・橋本正春・奥村吉信・高慶 孝 1981 「富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要」
　　上市町教育委員会
　　酒井重洋・橋本正春・高慶 孝 1982 「富山県上市町弓庄城跡第2次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- タ 高岡 徹 1980 「富山県」「日本城郭大系」7 新人物往来社
　　高岡 徹 1982 「富山県上市町柿沢城と国人士肥氏の城館配置」『かんとりい』No.6 越中の歴史と文化を考える会
- 富山県教育委員会 1965 「極楽寺遺跡発掘調査報告書」
- ナ 中谷良一他 1982 「福山天神遺跡」 兵庫県龍野市教育委員会
　　福崎彰一 1977 「瀬戸」「世界陶磁全集3 日本中世」 小学館
- ミ 三鍋久雄 1977 「立山町の地形・地質」「立山町史」上巻 立山町
　　森 寛喜 1981 「湯ノ倉館跡」「東北自動車道遺跡調査報告書IV」 宮城県文化財調査報告書第71集 宮城県教育委員会
- ヨ 横田賢次郎・森田 憲 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
　　吉岡康暢 1981 「北陸一珠洲」『日本やきもの集成4』平凡社
　　米沢佳彦 1977 「武将たちの足跡」「立山町史」上巻 立山町

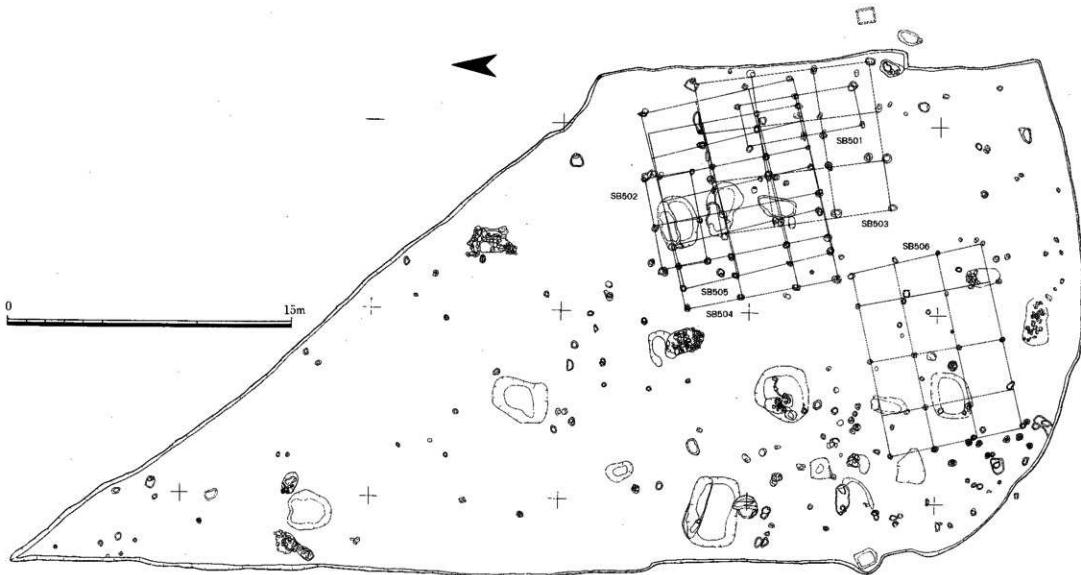
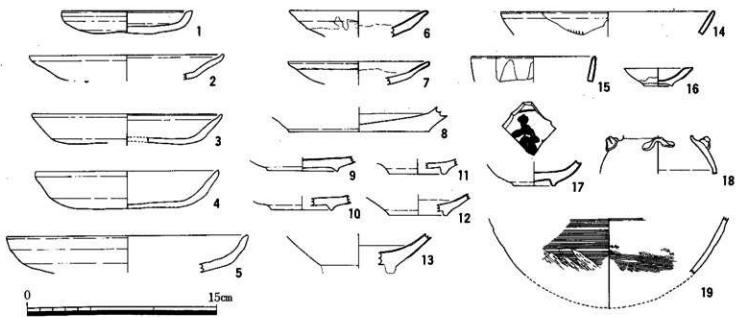




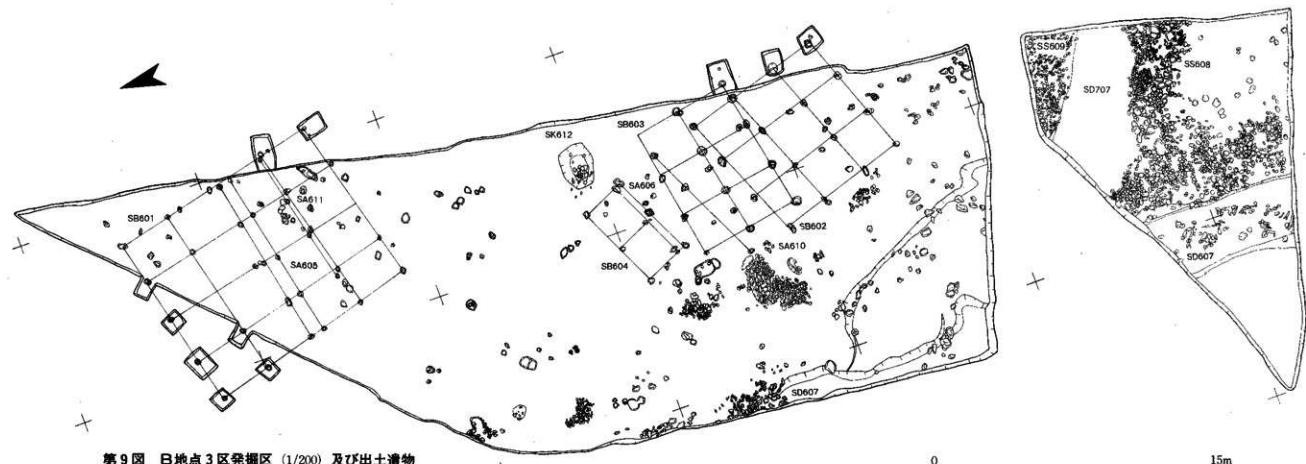
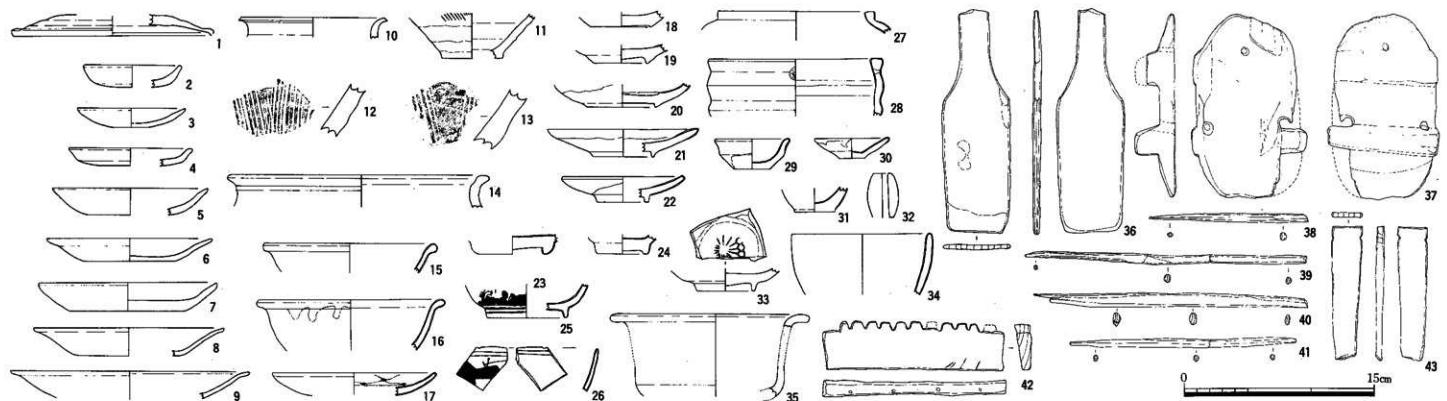
第6図 D地点出土遺物 (1/3)



第7図 B地点5区発掘区(1/200)及び出土遺物(1/3)
SB801(23)

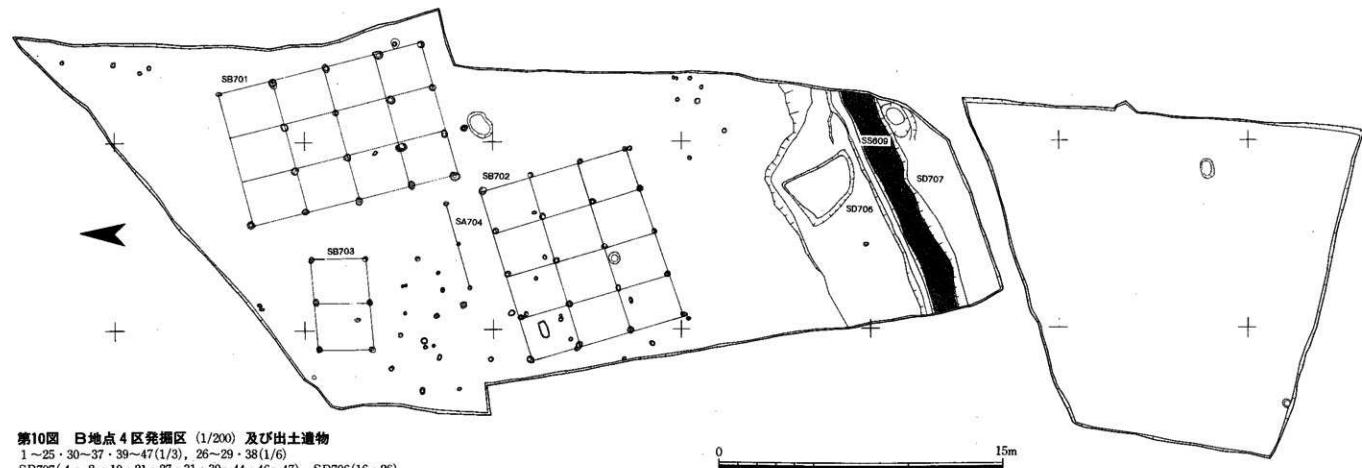
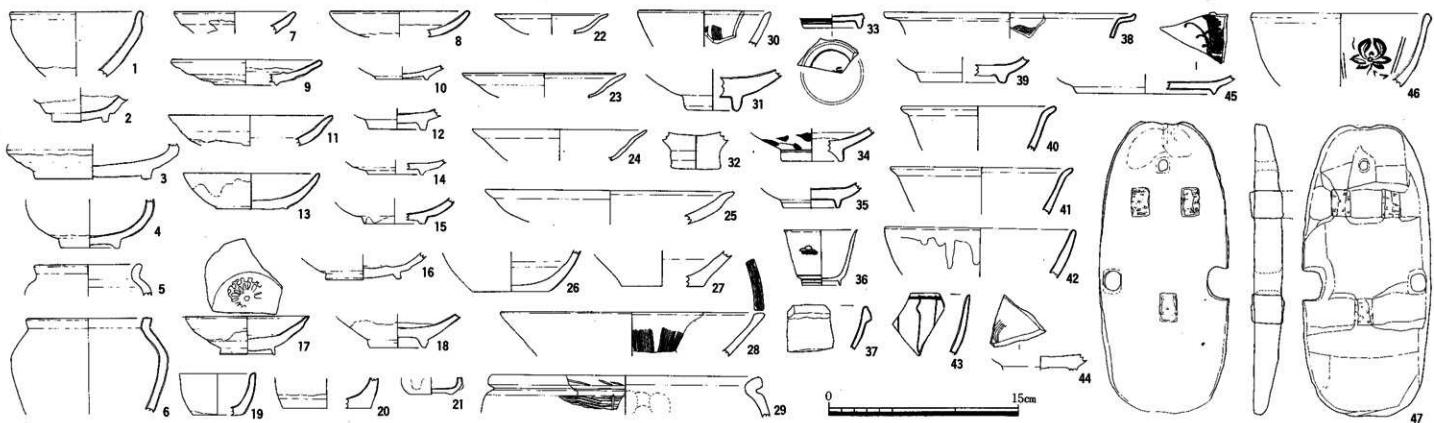


第8図 B地点2区発掘区(1/200) 及び出土遺物
1~17(1/3), 18・19(1/6)



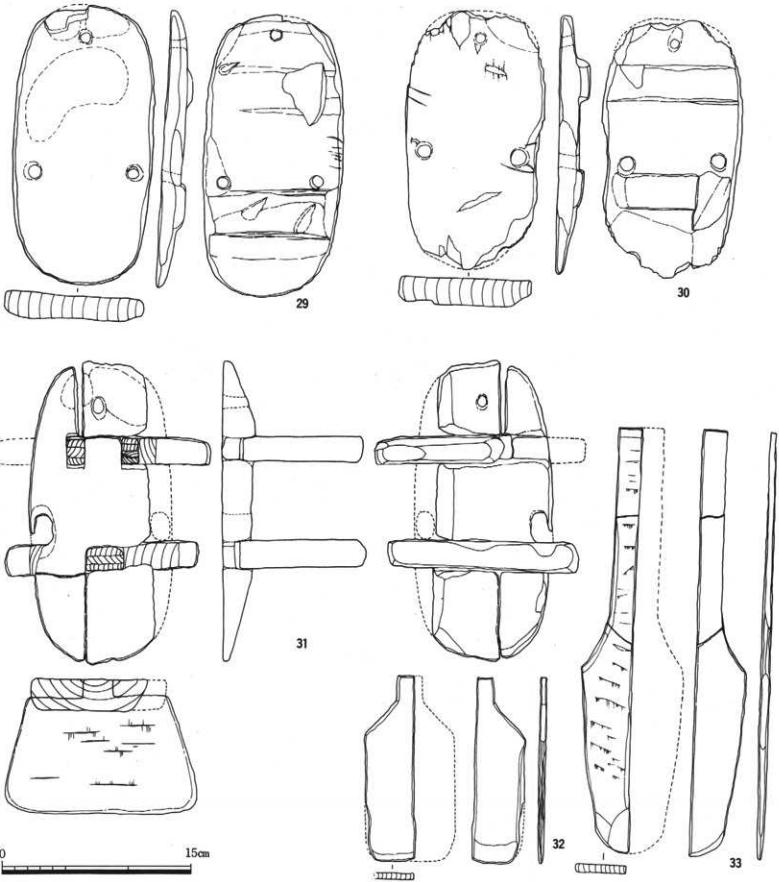
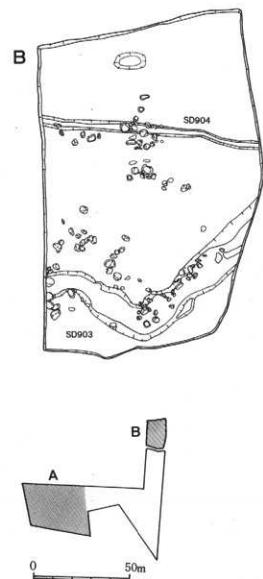
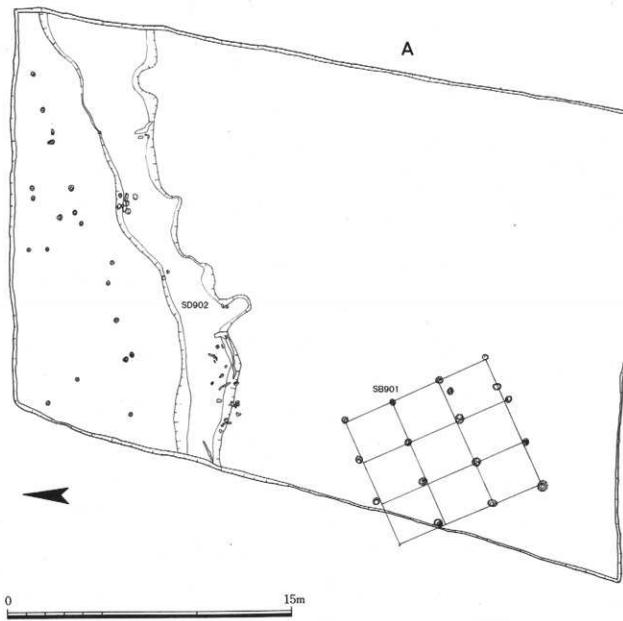
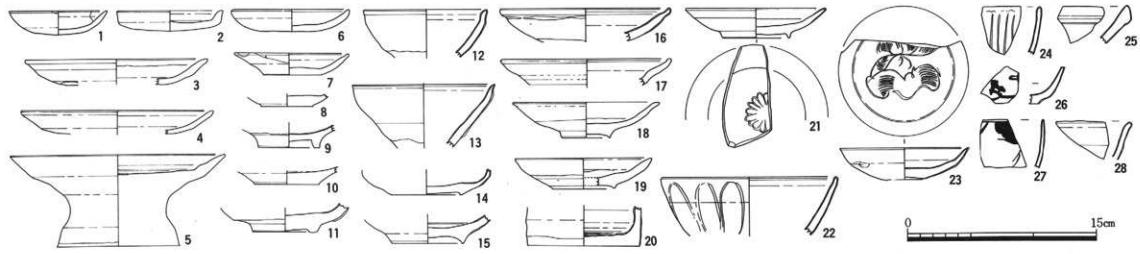
第9図 B地点3区発掘区(1/200) 及び出土遺物
1~9・12・13・15~34・36~43(1/3), 10・11・14・35(1/6)
SK612(11)

0 15m

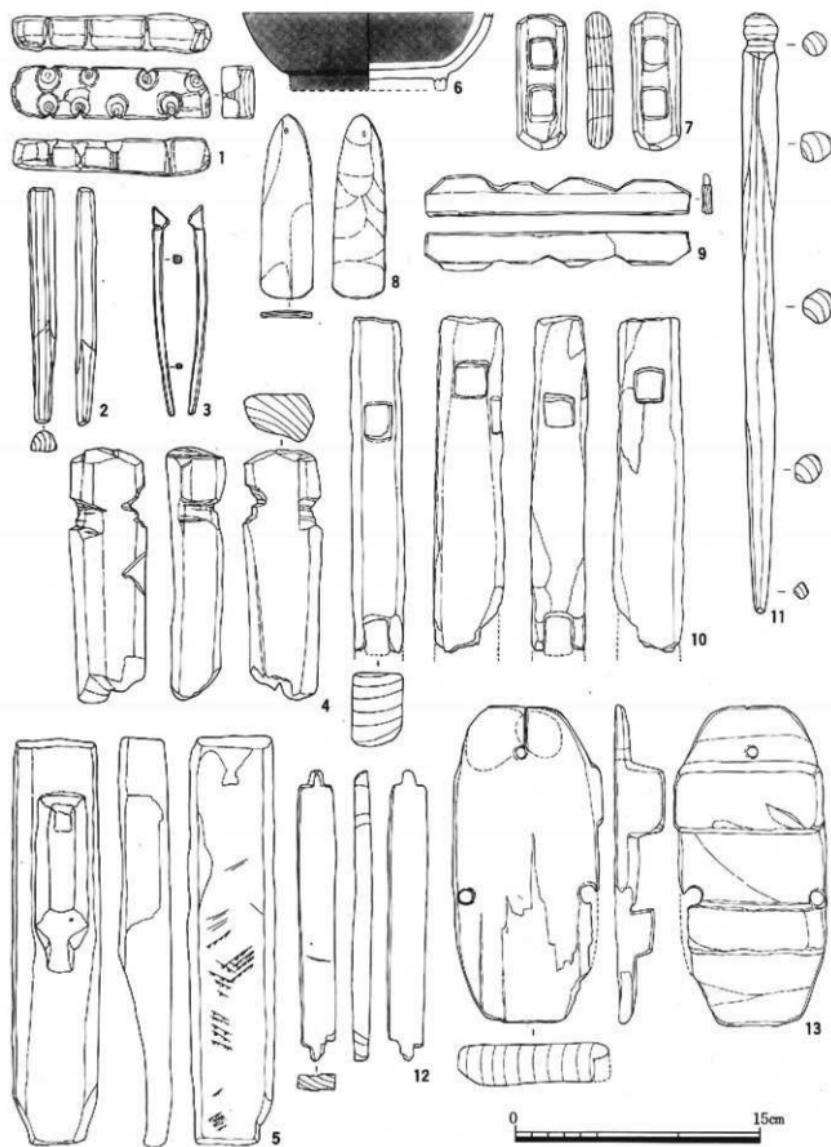


第10図 B地点4区発掘区 (1/200) 及び出土遺物

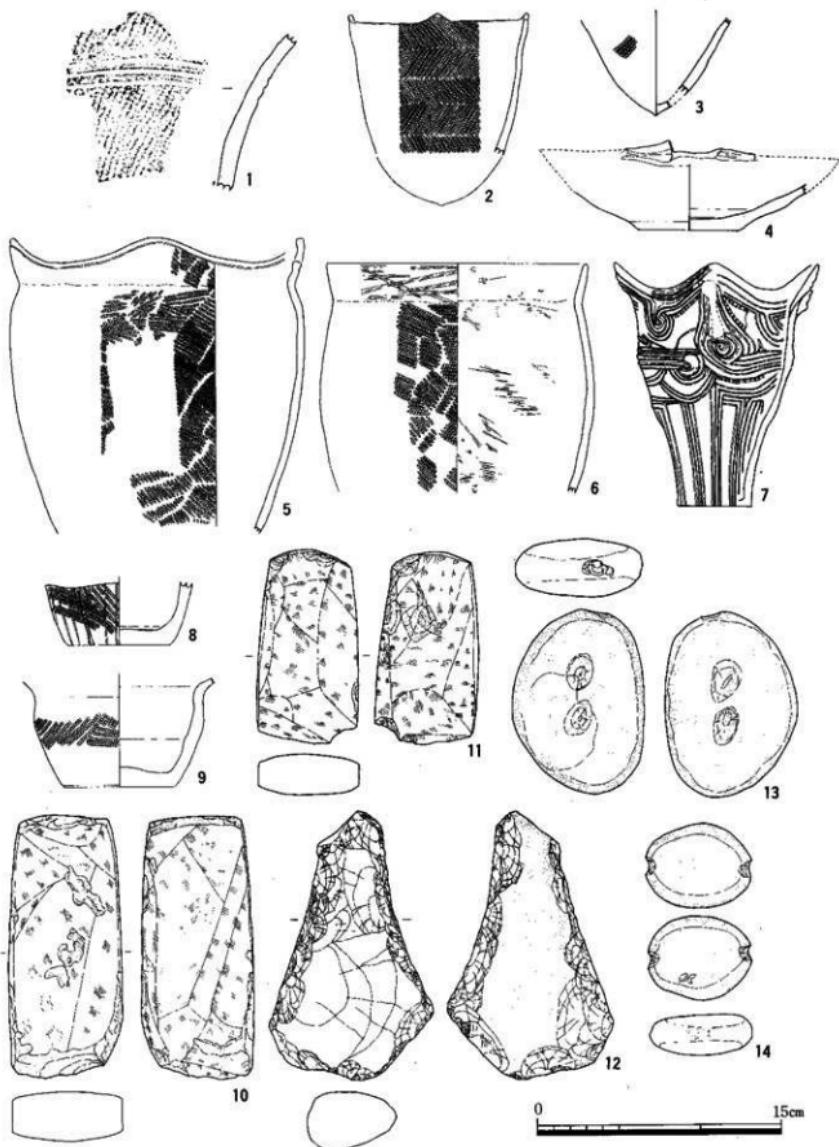
1~25・30~37・39~47(1/3), 26~29・38(1/6)
SD707(4~8・10・21・27・31・39~44・46~47), SD706(16~26)



第11図 C地点1区発掘区(1/200) 及び出土遺物(1/3)
SD902(1・2・6・11~13・29~33), SD903(3・4・8・10・14~17・19・24~28)

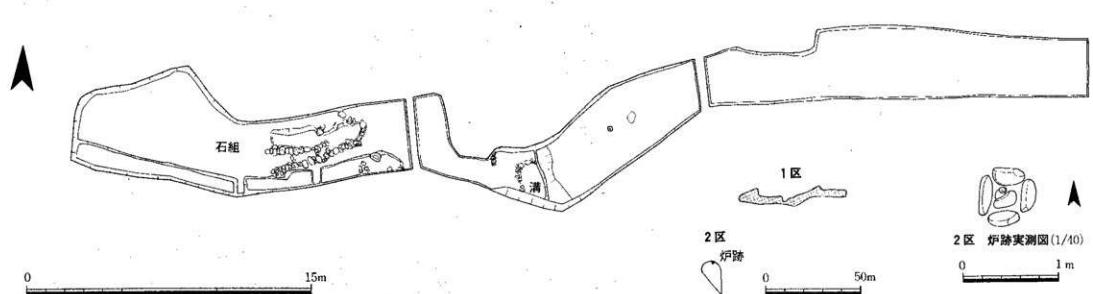
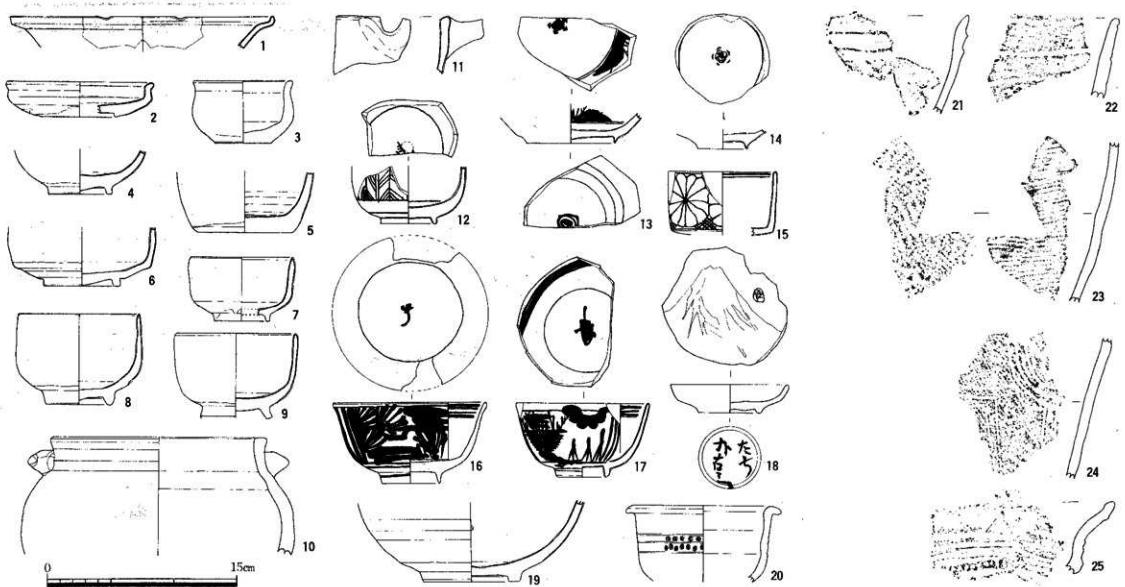


第12図 C地点1区出土遺物 (1/3)
SD902(1・2・4~11)



第13図 鎧塙割遺跡出土遺物

1・4・8~14(1/3), 2・3・5~7(1/6)



第14図 鎌塙割遺跡発掘区 (1/200) 及び出土遺物 (1/3)
20(1/6)

図版1
弓庄館城跡航空写真



図版 2
D 地点



1. 土壘南より



2. 土壘北より



3. 土壘・犬走り

図版3
D地点



1. 北より



2. 南より



3. 杭列

図版4
B地点 5区



1. 北より



2. 東より



3. SD806
SK803

図版 5
B地点 2区

1. 北より



2. 東より



3. 建物群



図版 6
B地点 3区



1. 南より



2. 建物群



3. SD607
SS608
SS609
(西より)

図版 7
B地点 3区

1. SD607



2. SB601
SA605



3. SD607
SS608
SS609
(南より)





1. 北より



2. SB701
SB702
SB703
SA704

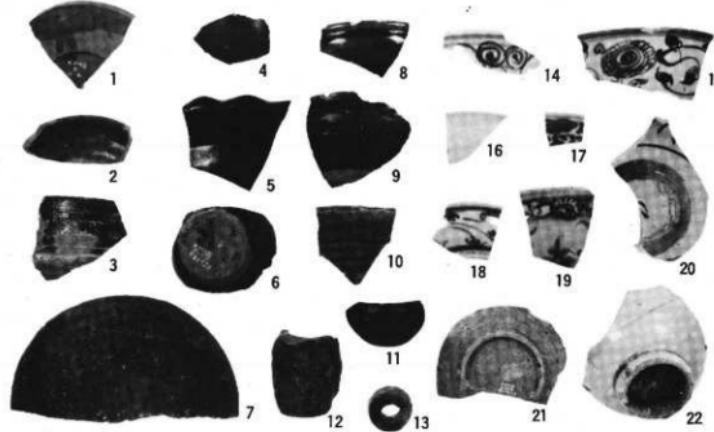


3. 作業風景

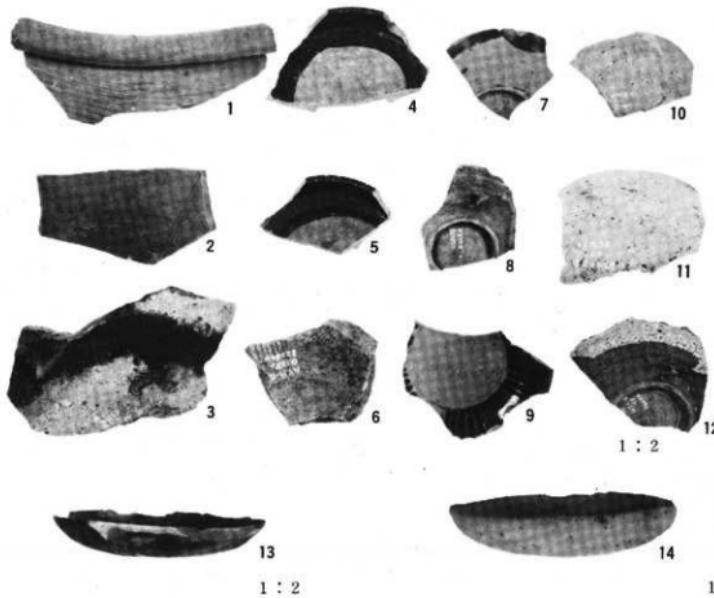
図版9
C地点1区



図版10
D地点
出土遺物



1 : 2 1



1 : 2

1 : 2



1 : 4 2

图版11
D地点
出土遗物



1 : 2

11

1 : 2

1

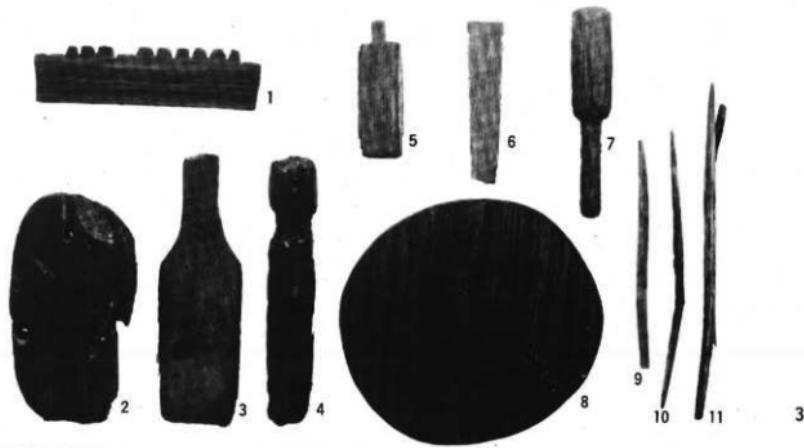
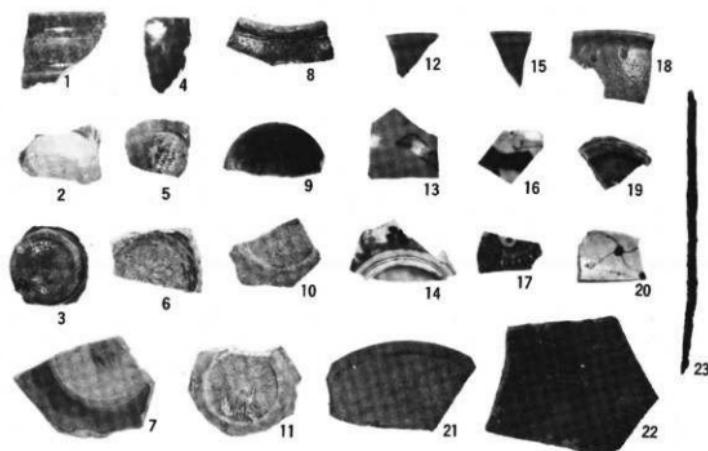
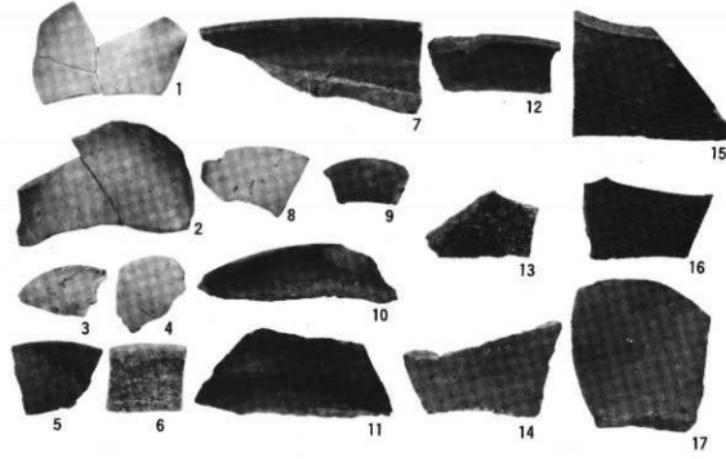
12

1 : 4

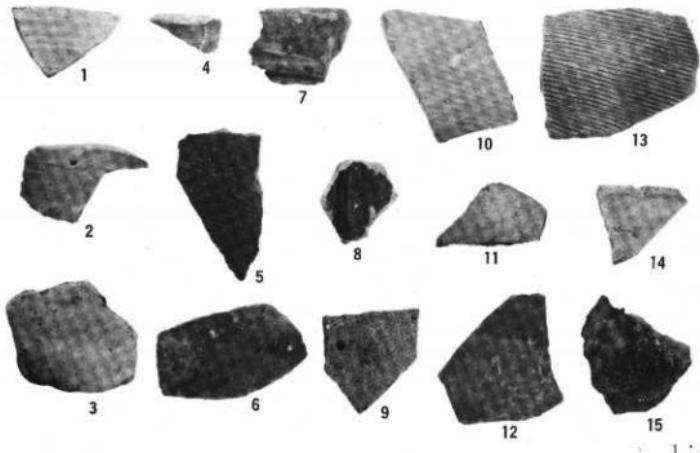
13

1 : 2

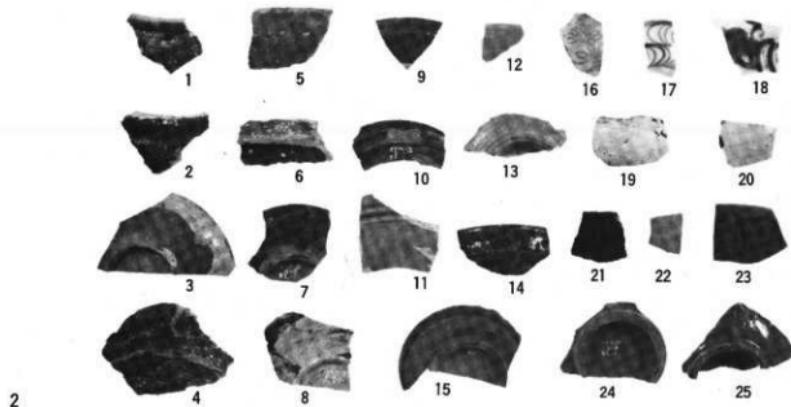
図版12
B地点3区
出土遺物



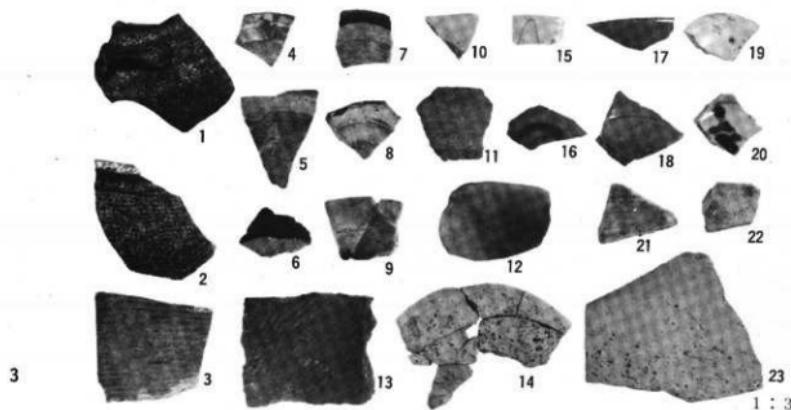
図版13
B地点5区
出土遺物



1 : 3

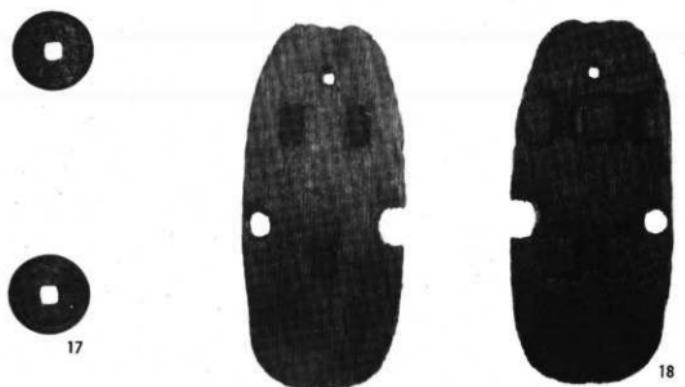
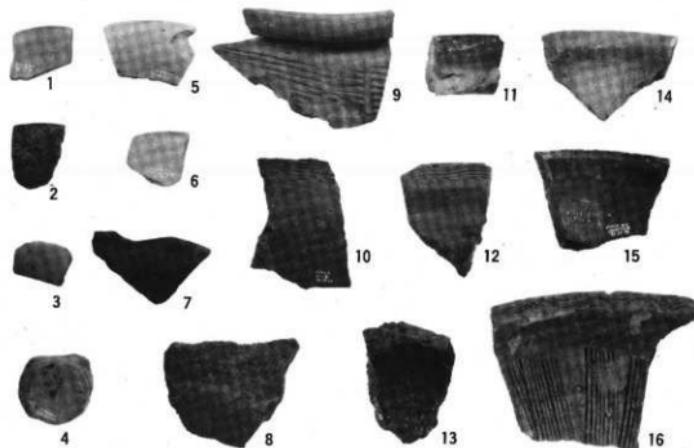
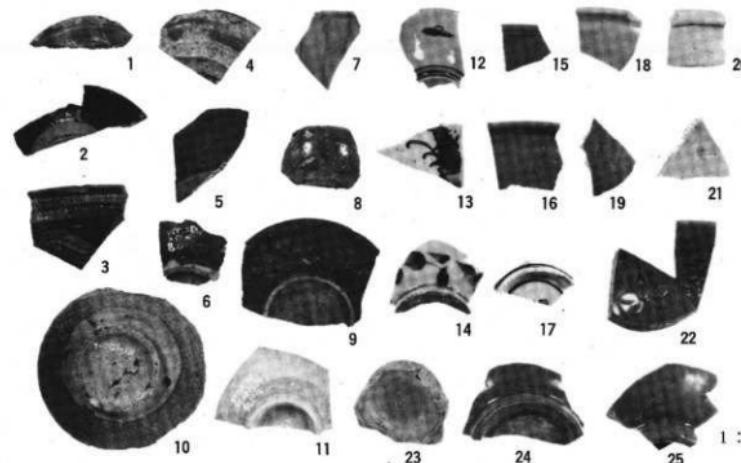


1 : 3

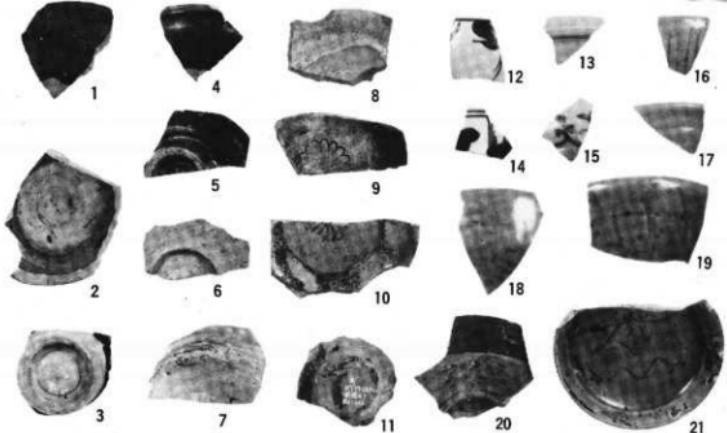


1 : 3

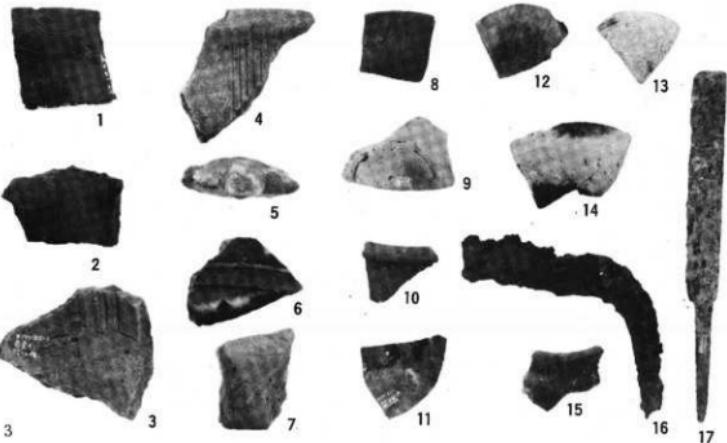
图版14
B地点4区
出土遗物



図版15
C地点1区
出土遺物



1 1 : 3



2 1 : 3



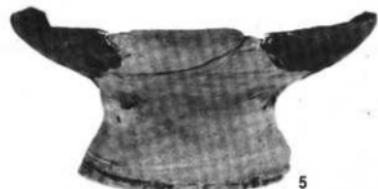
1 1 : 2



2 1 : 2



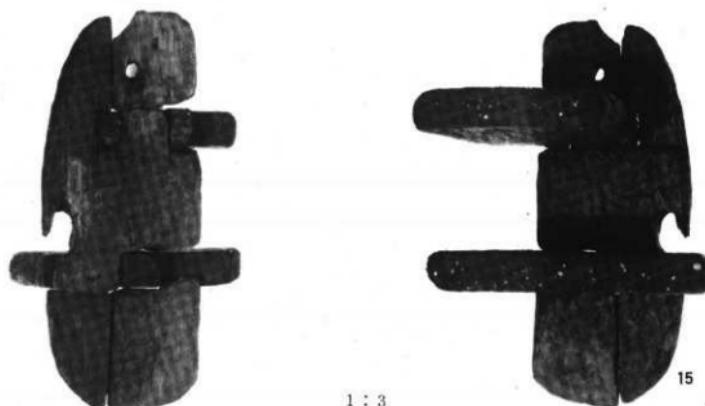
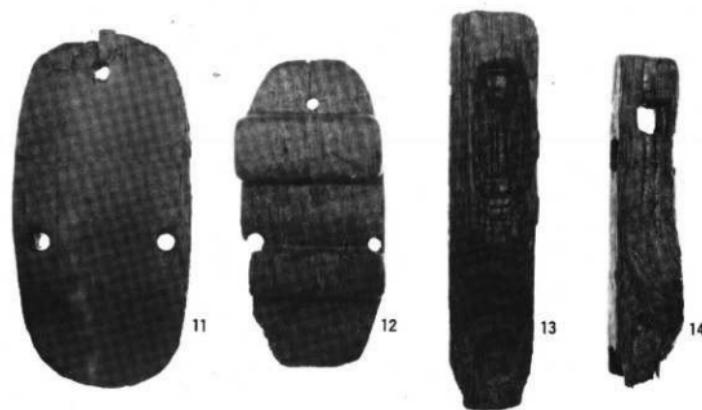
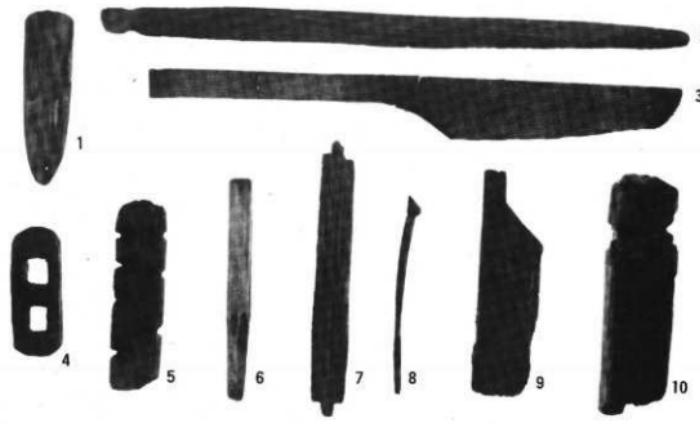
1 : 2



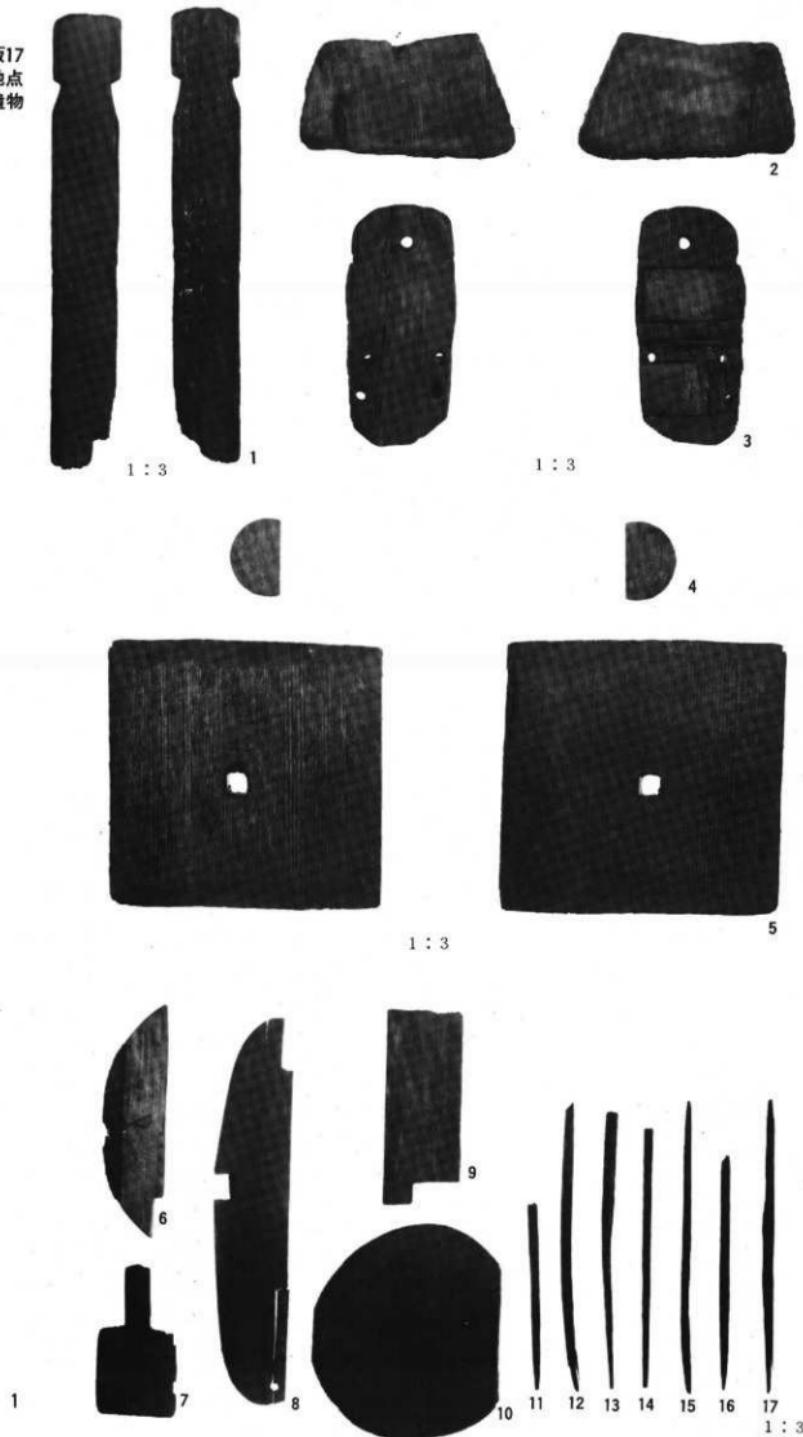
5

1 : 2

図版16
C地点1区
出土遺物
SD902



图版17
D地点
出土遗物



図版18
館窪割遺跡



1. 第1区
(東より)



2. 第1区



3. 第2区
(全 景)

圖版19
館窯割遺跡
出土遺物

